

第十四席

借て茲は清吉はこの程上の探察が激まいので成丈け内を出るに致ま  
 て居りました借ては此に懸の情と云ふやつ或る日のこと忍んで六間堀を  
 出まして縁町の梶田外記齋の内へ参つた是れ固よりお勝は逢いたいばか  
 りでは座います夜の四ツ少々過ぎ只今の午後十一時頃表をト〜と叩  
 いて 清「今晚は女の聲よて 女何方へ 清私でげす清吉で座います  
 女「オヤ今開けるからお待と云ふのはれ勝の聲ガチ〜と戸を開けて勝  
 どうだいマア清さん余んまりお前も無沙汰をして居るからせんに氣を  
 揉んで居たか知れかい誰れも居ないかられ上り。清「どうですかは免下さ  
 いと這入る後をピツタリめて 勝「サアお上り 清「有難ふ存じます上つ  
 て来て見ると膳の上にお肴が三色計り乗つてお勝が手酌でお酒を飲んで  
 居る所で 清「どうしたい誰も居ないと言ふのは 勝「今迄皆んか馬鹿つ話

文 化 噂 白 浪

文 化 噂 白 浪

えをして居たけれども今夜は免を蒙つて行きたいと云ふからア、何處  
 へでも勝手に行きたいからお出と云つたから多分松井町へでも行つて  
 女でも買へ行つたんだらう 清「氣樂もんだねい女郎買へ斗り嗜さぢや  
 ア困る先生は何したい 勝「先生は仕様が無いのどうも今朝つから飲んで  
 ぐづ〜云つてるんで清さんの前へだけれども仕様が無いよもう彼の年  
 だから酒を飲んでも汚さくつて涎を垂えたり水鼻を垂したりしてそれ  
 私に相手を爲ると云ふからあんまり汚さい爺の相手が出来さいからトツナ  
 り無理に勤めて飲まして寐かまたがもう二階へ寝返ると前後も知らず彼  
 の通り咽が下まで開へるぢやないか困りませよ……時に清さんお前も余ん  
 まり酷へやア些つと出て来るが宜やねい 清「出て来ると云つたつて此頃  
 は滅亡探偵が屬へので迂濶り出られやアしねへ 勝「そうかへそう云へば  
 清さん木場の冬木で大層大仕事をお仕たつてねい 清「ア、金五郎の野郎  
 が饒舌やアがつたねあの野郎はれ饒舌で仕様はねい時に誰も居さいのに

浪白噂化文

斯ふ遣つて若へ者同士が二人で居ると云ふのも極りが悪いじやアねいか  
勝何に構うものかねい何うあるものじやアさいやねいた前幸ひだ今夜来  
たのが何よりのこと腕を貸してお呉れさ……清何に……勝何をたつて坊  
主を片付て仕舞をうじやねいか 清馬鹿なことをするん事が出るもの  
かねい 勝だから仕様が無い譯がありやアしさいよ 清どうして譯が無  
いぞこぞやアさい向ふは確りもんで三人や四人抵抗たつて取付るもんじ  
やアこぞやせん 勝宜から腕をね貸しよ 清イヤは死を蒙りませうらん  
お大きな聲をえささんさよ 勝何にお前聞へたつて構うものか女の方が  
中々強い清吉は少々怖くさつたから 清マア歸りませう 勝マア泊つて  
お出でよ泊つて行かさいと今の話をもつと大きな聲でするよ 清困りま  
すねいじやア乃公は泊りますからと此所で尻が落付き差しつ押へつどう  
く 清吉飲潰れて其處へ寐て仕舞ふ女が掻巻を掛けて呉れるのも知らず  
にグッスリ寐る暫く経つと清さんくくと枕元で起すからハイと目を開い

浪白噂化文

て見ると手端に燭火の蠟燭が付いて枕元に立つて 勝サアお前手を貸  
えてお呉れさ 清何うするんだい 勝遣つて仕舞うからさ 清もう不可  
やね先刻でさい不可いと云ふのに今にありやアもう酒も何んにも醒れて  
居るから餘計不可やアしさい 勝ううたらうと思つてお前の氣を引いて  
見たのさもう片付けて仕舞つたよ 清片付けた……へい戯談言ちやア不可  
へ 勝何虚言を吐くもんかねい私か片付けたから前は死骸だけ取片付  
をして呉れおけりやア困まる死骸を來ては覽と云ふから 清じやア行つ  
て見ようど死骸を二人で上つて見ると梶田外記齋床の上に賤摺返つて居  
るから 清姐子寐て居るさやアねいか 勝寐て居やア仕さへと言はれて  
顔へ手を當てし見ると息が絶へて居るさ身体が少々堅くあつて居るから  
清どうしたんだい刺殺せば血が出ることもあるが血の氣はさし経でもま  
たのかい 勝益たつてお前私え位いの方で此の爺が締め殺るされるもの  
かい 清どうして遣つたんだい 勝どうして遣つたつて腕を開けて於て

貼の枕を返してそれを勝倉へ當て、畢を其上に乗せて鐵鎚で打つたんで  
清蔵へことを爲るゝ勝私えだつてお前と一統に成りたいから殺して  
仕舞つたんだね、勝前も私を女房に去てから浮氣を爲ると寐て居る所を畢  
玉を潰すよ、清蔵談言つちやア不可い潰ふされて堪まる者かそこで何か  
古葛籠の様おものは無いかど此處でお勝が幸い古る葛籠のあつたのを  
してろれへ死骸を打込んで連雀を肩へ背負つて清吉人知れず表へ出で、  
一ツ目の川へ持つて行つてトンプリと水葬禮に行つて仕舞いましたそ  
で四五日たつて掘田外記齋の世帯を取片付けてお勝は鬼坊主清吉の内へ  
ヌツと運入て仕舞う天下暗ての夫婦共に暮えて居りました然るに天網恢  
々疎にして漏さず時に勝町奉行曲淵甲斐守の手に取へられ此で清吉お勝  
大島町の金五郎が召取りにある此時に大坂の喜八は用事があつて他出と  
致して居つたから悪運の強い所か喜八丈けは通がれた借て三人の者を一  
通り取調べ無論東叡山寛永寺の勝名前を騙つたる隙があるに依つて安渡

のある譯はございませぬ然る所清吉金五郎は東の大坂へ運入つてお勝は  
無論女牢に居りますお牢内でも清吉金五郎は幾らか樂をして居りました  
が金五郎は病へ付さまえて遂いよ之れは牢内で死去致しました清吉お勝  
共に處刑は免るゝ筈は無いのであるから最早十分に覺悟を去て居る所未  
だ此奴等の悪運の強い所か丁度其時に徳川三代將軍大猷院家光公の百五  
十會忌に當つて徳川政府に於て大赦を行ひそれ一統の罪を減  
して下さる其處で幻のれ勝は八丈へ遠島極りまえて鬼坊主清吉は呼出  
去の上佐渡の金山の水酌の人足を仰付けられました八丈三宅新島皆是が  
何れも遠島と申さす同じ遠へ島へ參るのでも佐渡は遠島とは申させ  
ん徳川時分は町奉行に於て佐渡行を云へ渡しますするまはお處刑相濟ん  
で改めて佐州水酌へ人足を申し付けると云ふのが法則でそれから町奉行  
所から直ぐ又佐渡へ行くから佐渡行の人は牢へは參らんで町奉行から  
鞆籠へ乗せて行くのは當前なのである借て清吉は其鞆籠へ乗せられて

浪白噂化文

あれから本郷へ来て来て中仙道板橋から藤浦和から大宮揚尾桶川鴻の馬  
熊谷深谷本庄を通つて新町へ出で鞍ヶ野から高崎高崎を道うて板倉安中  
それから松井坂本輕井澤沓掛追分と来て追分まで乗り込んであれから越  
後路へ切れすから小室田中上田榑戸倉八代齋川を渡つて善光寺大田切  
小田切の難所を越えて中山八宿を下りると越後の高田西へ行つて出雲崎  
出雲崎から十八里の海上を渡ると佐渡の富津と云ふ所へ船が着いて富津  
から相川と云ふ所へ往く相川で佐渡の掟を言へ聞かせる島を破らうとま  
つて縛又就くものは狐軍資に行ふと云ふことを申し渡されす狐軍資に掛  
つて助かるものではありこれから其水酌へ人足と云ふ者は金山の穴へ通  
入て水を汲み出す役で穴の事を何方では敷とすままして幾つも敷と云ふ  
ものはありまきて其敷も色々名が付いて先づ新規の敷在切山大番八代  
の敷杯と云つて色々名があります中に誠にいゝ何年とも無く堀てく堀  
り盡して海の下へ山の底が二里も堀り出まて居るので誠には悔しい所で中

浪白噂化文

に其殿と云ふのがボン／＼中で殿して居る背負と云ふのが吠を持つて山  
から出て参ります手に蝶螺の壳を持つて居りまして中へ油が滲入つて  
れへ燈心を入れて火が点いて居る人がもう命の綱で此の明りを消さん様  
にまて吠を背負つて出で来るのを背負ひと云ふ此方へ来れば撰分田圃  
と云ふのがある出世をまて行つて役を勤める様になりまとも中々樂  
が出来ますもので差配人とされれば一番の頭之れは一人しつきやとさいま  
せん伊案内でも伊座いませうが佐渡は十年の渡罪其處で八九年も働いて  
漸く差配人又成るもう差配に成れば沙婆も近う伊座いませ併て清吉も初  
先て此所へ来て實に悪黨の嫌がる佐渡當人も泣く／＼水酌を勤めて居る  
茲に兩國無宿の鑄掛屋松五郎と云ふ者が先きに佐渡へ参つて居りまして  
これは沙婆に居ります時分には松や清吉やと言ひ合つた中で一つ鍋のも  
のを喰へ合つたこともあるから幾らか松五郎が目を見て樂をさして與  
れること哉之れは清吉の身に取つては仕合せ……非番の時は山へ遊びは

参ります此の山へ遊びよ行く分には構へません何處まで行つても勿論行く所はさし何百丈と云ふ下が唯茫々たる所の葎海原でありまよから別つに逃げる所も無いに依り山へ遊びよ行くのは更に構ひません或る一日清吉は非番の時に山へブラ〜遊びに参つて之を佐渡の檀特仙と云ふ松五郎も今日は非番と見へまして同じく山へ遊びに参り 清松やい何うした清吉通常は松五郎は一階上の人でありますから中々呼捨には出来ませんが誰も居らなければ兄弟分だから斯様に互に呼捨よ致まて居ります清何んどどうも佐渡と云ふ所は酷へ所じやないか酷いさア 松酷いたつて悪黨の怖はがるのは佐渡だが清吉お前も随分此へ来て驚いたらう 清乃公もう驚いたつて漸々少々此頃手が慣れて来たが最初は豆が出来やがつて皮が剥けて肉が出るるれでも水を酌へて居るんだから實に酷かつたが此の節は漸々手が慣れて来た……けれども十年の辛抱は出来ぬのう 燕出来るもんぞやないよ 清古く来て居るお前だつて酷い所を見ると乃公

は此先き迎も辛抱は中々出来ぬ 松乃公だつて實に酷くつてもう堪らぬいから一つ島を抜ける積りだ 清島を抜ける……此の島が抜けれやうか 松ううよ先づ此の島を抜けるには九死を逃れて一生を保つと云つて迎も生き様と思つた日やア抜けれぬ死うと覺悟をすりやア又た抜けれぬい事もあるゆい 清今お前に抜けれられて仕舞つた日にやア乃公が一人に成つて尙ほ仕様がぬい手前島抜けを爲んから連れて行つて呉ぬいさア 松ううよ一人抜けるのも二人抜けるのも同じこつた相談よのか一つ 清乗るども何時にしやう 松七月十三日は休み日で殊に通船止め七月の十三日と極月の大晦日は間違があると云つて船を出さぬへんだらう云ふ日の方はいつて宜からうと思ふから此十三日に爲やう 清そんから確かにそうと極めて置ふ 松手前真夜中に成つたら密々ど皆んかの寐息を窺つて抜けて来い乃公の方も寐息を窺つて此處へ出で来る心得だ 清越後路は何處が一番海上が近へだらう 松向ふよ見へる山があ

文 化 噂 白 浪

るさア 清ム、松アノ向ムに見へる山が八彦山だ下が寺泊りと云ふ所  
で之から十六里ある出雲崎へ往くと十八里あるから何しても十六里の寺  
泊りへ往くより仕方がねい 清何ぞ先づ宜い様に松頼むせ……松、ろ  
れじや屹度來月の十三日を忘れるさよ 清何んで忘れて宜いものかと互  
に契約をして其日は別れて仕舞ふされば早いもので七月の十三日の夜に  
ありますと清吉中々察ても察付かれません監の者の寐息を窺つて漸く披  
け出し一生懸命に撞特仙へ登つて参りますると一丁斗り上に入影が見へ  
るから 清松か 松オ、清吉か早く来い〜と云はれて清吉大いに喜び  
急いで後から馳て参ります其夜は丁度七月十三日の月……月は皎々として  
海面に輝き亘り玲瓏たる月色天地を映じまるで白晝の様で浮座います。  
松オイ清吉か 清乃公ださうも息が絶れて熱くつて仕様がねい 松、そん  
きに急くには及ばさいこれから兩人連れて山の頂巔まで来て初つ鼻の所  
へ参りまえて先づ此處で一つ休息をまやうと二人がうれへ来て石の上へ

文 化 噂 白 浪

腰を掛け 松清吉宜い月夜ださア 清宜い月夜だ……松に一人寐ねい奴が  
あつて咳ばかりして居やアがつて遅くまつたい 松遅く成つたつて幾ら  
も遅れた譯ぢやねいよ……何しろこれから骨だよ 清これから骨だよ云  
ふのはどう爲る積りあんだい……マア第一此山を何うまて下りるんだい  
松何うして下りるたつて此の山が下りる様に道でも付いて居りやア心懸  
の無い話亦道が無いから勝手に遊びに出すんだ 清ろれじやア何う爲る  
んだい 松何うするも斯うするもねい是れから飛び下るんだ 清飛び下  
るんだ……それあゝ大變じやアねいか……と鼻へ出て覗いて見ると下は眞暗  
で見へませんが見えぬか向ふよキラ〜月の光りに水が見へるのが確かに向  
ふは海と見へる山の麓は陰に成つて居るから些つとも見へません 清松  
何の位いあるだらう高さが 松未だ此山へ上つて測量て見た者は無いけ  
れども随分あるさア 清下は何んだらう 松大底海だらうと思つて居る  
けれども下に岩でもありやア、體が粉碎に成つてしまはア 清へエ夫り

やアどうも厄介だあアどうか斯ふ下りる工風はねいかしらん 然どうし  
たつて飛んで下りるより仕様がねい命を捨るのは覺悟の上九死を逃れて  
一生を保つつもりだそんな弱いことを云ふお鬼坊主と肩背を取つて居る  
れ前じやねいか若しうれでも嫌やだと云んお前はお前は監へ歸いて人知れ  
ず寐て仕舞やア明朝松五郎が島拔をしたと云ふ極ぎにある斗りお前の監  
から出たのを知るものはありやアまねエ監へ歸んねい 遣そんなことを  
云ふもんじやアねいやお前んな強いことを云んお前飛込みやアお  
懸待らねいおそんなことを言つたつて急に飛込めるもんかお 遣それ見  
やあお二人は鼻へ出ては覗へて見又た怖いから一歩退く氣を取りあをし  
ては又た鼻へ出て覗へては見たが何にまろ下が何の位いあるか深さも分  
らす流石豪膽の清吉松五郎は暫く思案を去て居ると 遣松…… 遣オイ……  
寺泊りと云ふ所は何方の見當に當つて居るだらう松五郎は鼻へ出て來  
て 松此の方角だらうと指差し知らまて居る隙を覗つてアんと松五郎の

腰を突いた 松アツ……と云ふ聲を上たか鑓掛松底の知れぬ谷底へ落ち  
て仕舞いませた 遣ハッ……と松を突き落して於て上から覗へて笑  
つて居る 遣松を一つ試験に放り込んで遣つた奴が死去て仕舞やア松へ  
歸つて寐て仕舞う奴が生きて置たら乃公が後から飛込ひ旨へあア……ガ  
中々汝つは無事で下には落ちねいおと鼻へ立つて下の様子を覗つて居る  
とヤ、暫の間は寂實とまて何の便りも傳いませせん 遣こりやアもう逆  
もいけねへ松は死んで仕舞つたあアそこで松へ歸らうと思ふと氣のせい  
か下の方で呼んで居るから鼻へ腹道に成つて下へ首を廻し耳を突立つて  
聞いて居ると遣か下の方で幽かに松五郎の聲とまて清吉やアい……と云  
ふのが谷響又當つて來るからピン……と響く 遣オヤ……松か呼んで居  
やアがるおオ、イ松やアい今往くから待つて居ろと云ふのが之れは下へ  
は届きません音が外れて海の方へ行つて仕舞ふから届かぬい 遣ヤア大  
變だ松の野郎は放り込んで遣つたから何の苦も無く下へ落ちたが公乃は

覺悟をして飛込んだ放り込んで呉れる人があつたこれア仕様が無いと  
… 感念を去て清吉後ろ向きに成つて較々暫く合掌を組み南無阿彌陀佛と  
云ふ聲を一聲遣してパツと飛込むブン〜と耳へ風が當つて較々暫  
の間空中を廻るが如き心持がまて居りましたが暫くあつてドーンと落ち  
た波打つ際の砂原でございませうから清吉向ふ腰まで突込んで仕舞へま  
たハツと思ふともう土面に自分が落ちて居るからボツと一息吐く所へ  
松が驅出して這つて来て 松ヤイ清吉じやあいか… 道エ、松か 松  
此の野郎乃公を突き落しやアがつて 道誠に済まねい實は試験に這つた  
んだ 松試験で遣られてお堪りがあるものかおにしろマア〜お互に無  
事で芽出度かつた未だ〜悪運の盡きねいんだと兩人は大いよ喜び先づ  
此處まで下りて見れやア大丈夫… マガ未だこれから先きが九死一生だ  
せ九死一生か 松マア乃公に任かして置けと是より兩人船場へ来て船を  
切り取つて島を抜けるの伊話し……

第十五席

扱て爰で兩人は兎に角船場まで往つて船を一隻切取らなければ十六里の  
海上を行けるものじやア無へと考へましたから 松何爲る清吉裸体に成  
れど是から二人伊仕着を脱て海へ捨て仕舞ひ下帯を二本繋ぎ帯を二本つ  
きぎ以上四本をつきと恐ろしい長い物が出来た松五郎夫れを腹へ巻  
松清吉汝も腹へ巻ねへ 道連聯つちまうせ 松つあがつても好い 道何  
是如斯ことと爲るんだ 松万一人が死ぬやうな事があつても斯ふ爲て  
置けば死骸は離れねへ敵や鯨の腹へ這入つても二人一緒の腹い這入れば  
心持が好じやア無へか… 乃公が見て置いた此處に船板がある大方是は難船  
爲て船が毀れて此處へ吹付て居たんだらうが此奴ウ使つて船場迄越さ  
ければ逆も泳ぎは壯者でも斯ふ高浪が立て居ては仕様が無へからはへ  
て行くと兩人で九尺斗りある船板を擔ぎ出してザブ〜〜海へ這  
入つて行く二十間斗り参りますると大いなる處の岩が海面へ出て居る其



浪白噂化文

岩へ高浪がドブリーリ……と打突つてドツ……と引て行く二人は九尺の船板の両端へ捕つて岩より上り、松、高浪も持て往て貰はさけりやア詮方が無いと待て居ると男浪女浪が頻りに打寄て居ります。騒いで一際高き處の男浪がド、ド、ドブリーリと来たから兩人時ころ來れるる船板を以てドブリーリ飛込ひと岩に打突つて引く浪の爲に二十間斗り沖の方へ持出される兩人は確乎捕つて足で向ふへ……と楫を取て進むやうに爲て居るがドブリーリ……と浪が顔へ打突る度々に二人はガブリと沙を飲む其水の鹽つ辛いたつて鹽へやうが無い。道、松乃公鹽水飲んだせ、松乃公も二三度飲んだ鹽つ辛へじやア無へか成丈け飲まねへやうに爲る一生懸命に足で楫と取り乍ら前へ……と進んで行くドツ……とエツ……と云ふ聲が聞へる。松、清吉船が來るやうださア、道、船が來るせ……通船止ださんて當てにも成らぬへサツ……とエツ……と船を漕ぐ聲が聞へる。松、大きい聲で叫鳴れ……道、チーイチーイ助けてお呉んさい難船爲た

浪白噂化文

もんだから助けてれ呉んさいと叫ぶサツ……とエツ……と往て仕舞う聲が聞へさくさつたかと思ふと亦暫く經過てモ……と聲が聞へる亦エツサ……と聞へるかと思ふと其聲は消てモ……と嫌な聲が聞へる。道、何んだか嫌な聲が聞へるじやア無へか、松、ウー、了解つた今日は盆の十三日だ幽霊船に乗て亡者が來やアがるんだ汝だの乃公だのを那落へ引込む積りだ、道、然んな處へ引込まれて堪るもんかエツサ……とサツ……と、松、亦來やアがつた那んか物を目的に油斷を爲ると水ウ喰つちまうぞ一生懸命に遣れと漸う……の事で船場へ來て船を一坏切取たが小船でございませすから誠に緊卵い其船へ二人は乗つて船は固よりございませんから板子を以て水を掻き……途々大海の中央迄來ると恰好異夜中の頃折節ゴーツ……と俄に大風が起り陸の方へ向つて吹く風でムいますから是れが却て兩人の僥倖と成り地方へ……と吹付られて遂に其夜曉明越後の國寺泊りの濱へ船が着きました此處は遠淺でございませすか

浪白噂化文

ら二三丁等前で船を押流してザブ〜砂原へ上つて来ましたが何爲る索  
の索ッ裸躰……揮一本で伊座いますから夫れを解て水を絞り其襦袢を占め  
て何うにも爲やうがありませんから錢は一文も無去磯端へボチャ〜上  
つて参りますると先方から色の黒い大きな男が襦袢を捲いで濱方へ下つて  
来る二人の者をヨロリと見て 男、ハア珍らまの事たあア久しく島破りも  
無いと思つたがヤ一島破りだと思へるナラリと思れが二人の耳へ這入つ  
たが見て見さい振を爲て松五郎も清吉も行うと爲ると 男、お前等ア何處  
へ行きささる積りだ 二人、ヘエー 男、其身拵で以てマア何處へも行ける  
ものぞやア無からう昨夜島拔を爲たに遠へ無へが真夜中に吹た風が幸ひ  
に成て此方へお前等ア来たんだけれども其身拵で歩いた日にやア物の半  
道も行かねへ内其道の人に捕えへられて仕舞う島股が捕まりやア云はつ  
ど狐軍責に逢うとは知れたこと狐軍責で命があるものぞやア無へや何う  
か助かる工夫は伊座いませんかと頼まれりやア亦い話しもあるけれど

浪白噂化文

も此方から好んで話すにも及ばねへ事だと云はれたんで松五郎砂地へ兩  
手を突て 松、何うも私共は全く兩人で島を脱けました被仰る通り後向の  
人に捕まれば狐軍責助かる次第は伊座いません何卒助かる工風があるま  
れば伊助け被下る理由には参りませんか 男、然ふ云ひささるおればお前  
方も苦心して此處まで來被爲たに由て教へて進るが是から二丁手り行き  
ささると格子作りの大きな家で蜘蛛の源左衛門と云ふ博奕打の親分があ  
る此りやア太した人で越後一國での大親分子分の七八十人も有る人だ頼  
まれたことは何事も嫌と云つた事は無い何を頼んでも飲込んだ何んか事  
を云つて往ても飲込むから蜘蛛親爺の源左衛門と云ふ其處へ往て親分が  
承知爲て呉れば屹度お前方も助かる佐渡破りのお前方が居ても減多に  
手の這入らねへ家だから一ツ其處へ往て頼みさせへ親分が飲込んで呉れ  
ば占たもんだ 松、伊深切に有難ふ存ぞます然ら其處へ往て飲込ん  
で貰ひませうと是から兩人尋ねて來て見ますと格子作りの立派な家格

子を明けて這入つて 松、多頼みすします子分が一人出て来て 子、出で  
被為まま 松、親分さんは住宅でございますか少々目目に掛つて願度ひ事  
がわつて参りままた子分が奥へ是を告げると親分殿出て来たが鏡子縮み  
の浴衣に八反の二タ重廻りの平縫を締め短草入と短管を持ってヌツと出て  
来たが立派な親分モ一年齡は六十四五歳に成らうと云ふ白髪頭の威勢の  
好い爺いでございます 松、エ、私共は江戸の者でございまして松五郎清  
吉とす者實は昨晚島を脱けました者でございまして島に居りまする頃  
から親分さんの御名前は雷のやうに承知を爲て居ります何卒親分一ツは  
情けを持ちままた吾々共を兩人御助け下さる理由には相成りませんか  
源、ウムー然ふかい夫りや〜久しく島破りも無かつたが中々辛へ處で瀧  
足よ十年勤め上げるには骨の折れるこつた昨夜真夜中にぬらい風が吹た  
〜、風がお前方の傍伴に成たんだ折角来て頼む者を豈夫無情に斷ること  
も出来ねへ乃公欲込んだ 兩人占た 源、何んだ占たとは……是れ野郎共

子「へい 源、乃公頼まれた事だに由て欲込んだから二人世話を爲て遣れ  
子「へいと子分が水を持って来て呉れたから足を洗つて上へ昇る何爲る下帯  
が濡れて居るから奥間を二本切て来たのを一本づゝ占めて白地の單物を一  
枚宛に平縫を一本宛呉れる其處で薬を飲ませ鹽物を煮て喰はせ一度に甘  
い物を喰はせは致しません一日二日かど段々に腹を拵へ此れから此家に五  
日十日と厄介に成て居りました何爲る大親分で子分も許多居ります女  
と云ふのは二十五六又成ります絶世の美人が一人それに婆アが一人居り  
ます其美人をお染と云つて兩人は父さんの娘でもあるかと思つて居たは  
が夜分に成ると一ツ座敷へ床を並べては寐て仕舞う處を見ると妻に違ひ  
無いと思つて居りままた段々様子を聞て見ると爺さんが新潟から妻と  
連れて来た女で女房は先年死去なつて今の處ではお婆さんありお内儀さ  
んありと知れましたから何んでも親分も壯健者で大層若へ者を愛まで居  
ると斯ふ思つて居りました朝の飯が過て仕舞ひますと源左衛門は多く

の子分を連れては賭場へ餘益を取りに行くのが吾輩でございませうから子分を連れて出て仕舞う跡へ残るのは婆アさんどれ染と云ふ妻と清吉と松五郎の四人でありませう清吉松五郎の二人は一間を借受けて世話に成て居る日の八ッ時分に成ると 染アノ婆ア 婆ハイ……と云つて婆さんが行くど 染アノお茶が這入つたから江戸の浮客様も然ふ云つて呉れと云ふから婆さんは二人も告る 二人有難ふ存じますと是れから三人火鉢の傍へで世間話しても爲さからお茶を御馳走に成る斯爲る事が毎日のやうでグスから仕舞には御互ひも馬鹿話まの一ッ位い爲る扱て此松五郎と云ふ人は劇場で爲ると菊五郎が這つて大層好い男だが實物の儲掛松は醜い男でございませう夫れに反對へ清吉は實に好い男でございませうからお染は測らづ此清吉に思ひを掛ける清吉が話しても爲るとニコノ笑つてお染は話しを爲るが松五郎が話しを爲ると聞かぬ爲さ其處で松が考へるには松ハ、ア此りやア女の方で思ひを掛けて居るに由て始終は女から持掛け

る其處で据騰喰ぬは男の辱だと清吉が態度好い交情に成れば必ず知れづには居さい知れしは中々に蜘蛛の親爺重ねて四ッに爲る汝も一ッ仲間だからと乃公までズバリと這られて仕舞う……此りやア詰らねへ好い思ひは清吉に爲れて此方までドンぐるみも成ちやア詰らねへ此奴ア間違ひの出來ねへ内に立て仕舞つた方が好からうと思ふから 然ナリ清吉モ一大きに身体も好く成たり何日迄斯ウ爲ちやア居られねへヒヤア無へか越後の内は險呑だ乃公ア親分に長く厄介も成た禮を述べて出立を爲やうと思ふが和郎も共に出立を爲ねへか 清乃公ア未だ身体が壯健で無へからモ一少し厄介に成て居度へもんだ 然然ん事云はねへで一緒に來ねへか……玄やア乃公は先へ出立を爲るせ 清然ん事云はねへもんだ根生の悪いことを云はねへで乃公の病氣の癒く成るまで一緒に待てし呉んねへか 松何も根生の悪いと云ふ譯玄やア無へが此處に居ちやア越後の内誠に累卵ねへ高飛を爲れば心配も薄く成ると云ふやうな譯和郎が立さ

やア乃公丈け立つから勝手になねへか 清然んか交際の無へことを云ふ  
んから先へ行きねへ 清夫れやア然ふ為やう其晩に成ると親分殿が歸  
つて来る相變らづお酒が始まる 源お染や江戸の浮客様を呼んで来い  
染ハイ……とお染自身で呼に往たから二人は其處で出て来て 二人此りや  
ア親分浮歸ん被爲まし 源今歸つて来た 松毎夜浮馳走に成りまして相  
濟ませんと此處でお酒を浮馳走も成て居りまえたが聽て松五郎が 松扱  
て親分私も色々厄介に成りまえたがモ一大きに身体も好く成りまえた  
から出立致さうと思て……清吉は未だ腹が眞實で無へからモ一少と浮厄介  
に成て居たいと申しますから清吉は殘まて参ります私には是から大坂へ参  
らうと思つて居ります親分の宅でグスから間違ひも座りますまいけ  
れども何爲る越後の内で心配で浮座いますから 源然ふさ乃公の家だか  
ら手の這入るやうな心配は無へけれども外へ出れば向ふに佐渡の見へる  
處心配爲るのは無理の無へこと然し身体が悪いのは詮方が無へから手前

丈け立つから立つが好い何時立んだ 松明日立ちませうと思つて 源餘  
り早いぞやア無か斯ふ爲る明後日立て明日客人に少と小遣を貰つて来て  
遣るから明後日に爲る 松有難う存じます是から其翌日に成ると源左衛  
門賭場へ出て来て其晩歸つて来て亦前夜の如く酒宴が始まる兩人も同  
く其處へ出て来た時 源松五郎 松へい 源乃公が今日客人に然云つ  
て彼人から二朱此方から一分と貰ひ集めて来た金子が此處に八兩ある乃  
公が夫れへ二兩足して遣るから十兩に爲て持て行け……お染兼て拵へて置  
た仕度を出て置て遣れ 染ハイと答へて出た仕度と云ふは單物も浮  
きんどの半合羽に博多の帯が一本に脇差が一本半股引に脚絆と甲冑と縁  
の仕度が残らづ揃つて居ります松五郎は涙を流して押籠さ枕許へ其れを  
並べ親分が明日早く起きければ成らんから今夜は早く寐ると云ふのを幸  
ひに寐所へ這入り 松ア、親分は越後には珍らまい人だ口は達者さ  
を云つたつて其丈けの事の出来ねへ方が多いがアノ親分は或心だと思ひ

なから其晩は寐て仕舞ひました翌朝に成て暗い内に仕度を爲て悉皆身掛  
が出来たから飯を喰て源左衛門の寐床の唐紙を明け 松親分じやア小  
哥ア立ちまそ 源オ、立つか途中氣を注けて行け 熱有難う存まそ…  
…姐さん休み被爲て後入やいますか 染チャは立かへ 熱ハイ何うも  
色々伊介又成りまえて有難う存まそ 源、玄やア先づ大坂へ往たら着  
たら着たど鳥渡手紙でも遣せよ…… 熱何れお禮手紙を遣ま升から 源ナ  
ニ禮おんどを云つて遣さかくつたつて好い着たら着たど手紙を遣しおヨ  
心配を爲るから 熱有難う存じ升 源、途中氣を注けて行けヨ清吉は 清エ  
、親分一寸松を其處まで見て遣りどう伊座いますから…… 源、見て遣るの  
は好いけれども名残は互ひに尽ねへもんだから 清、ハイ是れから戶外へ  
出て遣々掛掛松が 熱、清吉和郎は未だ身掛は平癒で無へど云つて殘つて  
居るけれども乃公だつて急に立つと云ふのは那處に居るお染と云ふ妻が  
和郎に思を掛けて居る万一汝ど好い交情ん成た日よやア何れ知れづに

は居ねへ知れれば那の親爺の事だから重ねて置て四ッも成る此子野郎も  
一緒に来た奴だからとドンケルミに乃公まで成るは知れた事其故乃公ア  
立つのだから大坂へ往て待てるに由り和郎も成丈け早く来るやう……決  
て那の女が優まい言葉を掛けても乘ねへが好いせ好い交情に成て越後の  
土に成て仕舞つちやア佐渡を免れた甲斐が無へ語らねへから決して心得違  
ひを爲るおヨと呉れへも戒めて清吉に別れて立て仕舞う是から後は日  
の内は誰も家中居あくる唯婆アとお染と清吉の三人切りお茶が道入の  
たどか何んどか云つて一間に男女差向ひで話しを爲て居る處へ其處へ子  
分の者さんぞが 子親分が被仰いませたが二百兩呉んさいと金子を取  
りよ来る 染、アイヨと渡して遣る時に若い女ど若い男ど睦じく話を爲  
て居ると 子、ハテ此奴は可笑いおと思ふのは男女七歳よして席を伺じう  
爲す李下よ冠瓜田に香で仕方が無い一人の子分が今内の姐さんと清吉さ  
んど睦く話して居たど云へば亦一人は二人が手を握り合て居た處を見た

浪白噂化文

どか無いこともあるやうに云ひたがる奴で、ハッ、と此事が評判に成たが源左衛門はトント存せません八月十四日の事で浮座いまして塙を仕舞つて歸つて参りまする夜に入りまして今日は何日より子分を大勢供に連れて歸つて來ると云ふのは今夜親分の家に泊り明日は八月十五日八雲山地蔵尊の祭禮の塙へ親分が出張して一日十五日の夜に掛けての大博奕一年の暮しを取上ると云ふ程大益の取れる日でございますから皆子分は尾て参ります先づ其中で重立た子分では出雲崎の藤五郎荒石才三松山兵七會津の權左衛門杯と云ふ重立た衆も参りますので皆身内に成て居ります此人等を連れて歸つて來る道すがらの咄し出雲崎の藤五郎が藤ねへ親分頼まれりやア嫌と云はねへの昔から貴郎の氣質で蝮蛇々々ど人が云ふ其氣質は結構だがマア成丈は是からは人を世話を爲るにも人を見て爲さきやア不可ませんせ松五郎と云ふ奴が立て仕舞つてから一寸清吉と云ふ奴に近付にも成たが小氣体の利た奴何爲る松と云ふ奴が立た跡は和郎

浪白噂化文

さんが朝出て仕舞やア家は婆アと姐さんと那の野郎と三人だから……姐さんだからと云つたつて心得違ひを被爲る氣支へ無いけれども然し若い者同士でグスから何んか間違へが出来ぬへものでも浮座いません出来て仕舞つてからとやア詮方が無へ出来ぬへ内が花でございませから早く清吉と云ふ野郎を追拂つて仕舞ささい飼狗よ手を喰れと云ふことが随分世間にはあり升から野郎を追つ拂つた方が宜うございませ世道々藤五郎が親分の爲を思つて云ふのを源左衛門 源此りやア次第に山たら清吉の野郎とお染と出来て居るかと斯く勘違ひを爲たから何處に成たつて此道斗りは別でグスから怒つて家へ歸つて來る 子分親分は歸りだヨ 染ハ、イ直にお染が立て來てがらり 染、サハは歸んさい大分早うは座いませぬへ 源何んだ早く歸つて來ちやア悪いのか早からうと遅からうと勝手次第だ早く歸つて來たのが悪いのか 染悪い次第じやアございません是から座敷へ通つて 源、サ、酒を早く持て來い歸つて來りやア酒を飲む

のが當然だどボン〜誰にでもてんボハッ當りで當り散し乍らお酒が結  
まる藤五郎は 藤然んおボン〜云つたつて詮方が無へ靜かに上んお  
せへ 源お染清吉の野郎は何う爲た 染アノ今方迄起て居りましたけれ  
ども強く風を引たと見へて何うも頭痛が爲る誠にも頭が重くつて氣合が惡  
いから誠に済みませんけれどもお先へ何卒免を被り升から親分が浮  
りよ成たら宜しく申して呉れると云つて僅た今臥りまえた 源然ん云ふ  
野郎だもの松五郎と云ふ奴は幾分か可愛がある奴だが清吉は何うも氣に  
入らねへ野郎だ籠棒さ〜幾ら遊び人でも那んお奴等を喰して置くことは  
出来ねへ巫山隠た野郎だ〜と云ふ聲が聞へるから清吉 清身体が惡い  
から先へ寐たのに然んかに云はあくつたつて好いと思ひおが寐所から  
出て来て 清誠に親分相済みません先へ免を蒙りましたが風を引  
居りまえて心持が悪いので強く頭痛が致しますんで娘さんに申上て免  
を蒙りまえた平生は親分のは歸りあさらい内に臥つた事はございませ

ん今夜に限つて免を蒙つたんで何卒親分浮勘辨被爲て浮呉んおさい  
源如何程風を胃たつてのめつて死ぬ程の事も有るゆへ乃公が歸つて来て  
から直に聲を掛けて寐るが好い人を白痴よ爲やアがつて汝杯ヲ誰の庇  
で命を継續でるんだ飼狗に手を喰れると云ふ事ア世間無へ事は無へ  
らおア乃公の面へ泥土でも塗れちやア合ねへからおア清吉は思考て居  
嫌事事を云ふと思ふから 清親分の前でございませすがは氣に入らさい  
が浮座いますすれば拙者が浮説を致まを何うも未だ鳥居敷の無へ男で  
ござへ升から符喋で被仰ちやア分りませんから平に打突て被仰て下さい  
まえ 源何を云やアがるど云ふより早く具輪の煙管を持って清吉の眉間を  
ヒシリ打た火皿が眉間へ這入つたから 清ハッ〜清吉は黙く  
分エ、親分奈是然んお荒い事を〜 源放擲て置け〜此子野郎誰の  
に今迄助かつて居たと思ふ乃公が殺さうと活さうと了見次第だ捕らる  
か子マア江戸の客人口惜しからうが我慢を爲て此方へ来て呉れ此方へ



くど連れて往て仕舞う清吉は床の上に血が流れるから傷口を押へて  
ツサリ座り 清酷い事を為やアがる……ハ、ア察する處乃公は若へ者妻  
が若へに由て乃公と妾と何か可笑事でも為たやうと思つてゐるんだが  
、一爰を以て見ると松は恰恠か奴だ……然し乃公もコレ越後邊りまで來  
て親にも打れた事の無へ頭へ手を上げられ此通り傷まで受けては此儘に  
濟す理由に行かぬ爺イ見やアがれ此仇は返さなければ成らんと寝やう  
と思つたが寝付れませぬ夜明の方に至りてトロ／＼と寝ると平生より遅  
く目が覺たから飛起て往て見ると誰も居ぬ火鉢の傍にお染は茫然と煙  
管を突て考へて居る 清姐さん早う伊座いますと挨拶を爲て勝手口へ  
参り顔を洗つて是から伊飯を喰て再び火鉢の傍へ來ると 染昨晚は伊客  
様何うも伊氣の毒様で何んとも妻は貴郎も伊説の爲やうも伊座いませぬ  
清姐さん親分は…… 染今日は八彦山の祭禮でございまして其處へモ一  
暗い内から子分衆を連れて出張て仕舞ひませた 清ハア然ふで伊座いま

すが何うも姐さん昨夜の伊様子では小哥が若と和女さんが若いから万一  
變な交情にでもと思ふ處から親分さんが小哥にア、云ふ事を被爲ませた  
の之やア無からうかと思ひ升 染眞實な妻も然と思つて貴郎に伊氣の毒  
様で…… 清イエ否に伊氣の毒様な事はございませぬがモ、姐さん私の  
云ふ事を聞て下さるか 染何んでございます 清小哥も頼にまで傷を付  
けられて見ると此儘には我慢も出来ませぬから小哥も此方に居ればこそ  
三品奴だが江戸へ歸れば是れでも子分の五十人や百人は持つて居る世夫女  
一人連れて往つたつて困るやうな事は爲ませぬから一緒に江戸へ往て伊  
んささるか何うです姐さん伊返辭被爲て下さいと云われて女は考へて居  
りませぬが言葉が無い 清何んど……お前さんと一緒に手を曳れて八彦  
山祭禮の場へ往て是れ見て呉れると云わん斗りに歩いて見せて遣りたい  
から何卒姐さんウンと承知爲て呉んさい 染マア誠相お然ん事が出  
出来るものじやア有りませぬ大勢子分衆や何か居る處へ和郎さんと手杯

を曳れて往つた日にやア助かる譯のものじやア有りませぬ 浪間達やア殺される丈けの事やア身躰は借て行きませぬスツと立て床の間にもまする親分源左衛門の平生差を取るより早くキラリと抜き 浪やア娘さん身躰は借て行ねへ代り首頭丈け借て行き升からと逃る奴を後から首をスツリと切離して其首を提けて是より八彦山地藏祭禮の場に踏込み親分源左衛門を切て頭重たる子分をも切殺し越後を退散する……

第十六席

エ、爰に彼の清吉の女房幻おかつは八丈へ流罪に成つて三年の月日を送つて居る内に幕府にお目出度い事があつて爰に大敵を行きはれまして勝は彦敷に成りませぬ處が引取方がお座いませぬスルと爰に大坂の喜八は當時淺草福井町二丁目大坂屋喜八と云つて日庸宿を開業せ先づ人の八九人も使つて方正く爲て居ります去れば此方へ引取を命せられる喜八は勿論清吉の女房の事でござい升から承知いたまてお勝を引取て家へ歸

て世話を爲て居り升るお勝も昔しに變らず女は好し年齢は五ツ六ツも若く見へる性質でござい升から唯喜八の家は茫然と厄介な成て居るのも氣の毒に思ひましたから 勝扱て喜八さん妾も斯ふ爲て世話に成て居るのも好いけれども何うかマア家の一軒も持ち難は身を助くる程の不仕合せ昔時覺へた端歌でも稽古を爲て何卒世を送つて見たいが何う云ふもんだらう 喜夫りや和女さんの了見ですから何を被爲うと構ひませぬけれども私の家も居る分には二年が三年居たつて構ひませんが然も斯ふ爲て居たら亦長い月日は嫌な日もありませうから何んな小さな家でも持つて弟子々を少と噂道具に爲て遊んで遊ばさい 勝けれども先立つものは金子だから何卒喜八さん氣の毒だがお金子を都合してお呉れさ 喜能う傍座います大志た事は出来ませんが家の一軒位持つんから二十か三十有つたら宜うございませうからと爰で喜八が二十五両の金子を拵へて貸與へましたおかつは其處で喜八と二人で毎日ブラ〜家を探して居り文

す内に淺草東仲町の新道に鳥渡爲た長屋立てがござい升が一間の格子作り又一間の竹の出窓座敷が三間斗りございまして勝手は廣し雪隠は付て居りまそあり二階が有り升る同玄長家建でも一寸住へる家でございませから是れあれば住へるだらうと云ふので早速家主に相談を爲て料代を拂つて此處を借ることに爲て大工を頼んで手入を爲たから大層家も美麗に成りまえた其處で伊神燈を吊下げて小歌勝次と云ふ表札を出て女一人に女中一人と云ふ暮去で爰に引移りまして今迄は鬼坊主清吉の女房で随分悪も働いたこと故鳥も通はぬ八丈島へ流され遂に白粉氣杯を付けたこと無いの此程では髪を結ひ湯に往て來て化粧を爲て美麗に成て表の竹の出窓の障子を一枚明け柱もたれて爪曳で三味線でも弾て往來を見て居る町内の若い者杯は是を見て 甲何んだらう那れは 乙端歌の師匠だ粹玄やア無へかど云つて評判を爲る途には二三人が一ツ往て見やうじやア無へかど揃つて來たのが手始めで段々弟子は殖て來る何爲る女は好ま

お世辭は好し今迄苦勞に苦勞を爲抜て來た者だから何處迄も優しく爲るから段々弟子は殖る斗り東仲町の事でグスから門並古若屋がある古若屋の若者さうは夜陰主人の前はお湯へ往て參り升杯と云つてはお勝の家へ來て端唄の一ツ宛も稽古を爲て吉原へ遊びに往た時藝者の三味線に合して唄ひたいと云ふ念があるから……今の處ではおかつも困らさいやうに成りまえた此師匠位い骨の折れる者は伊座いません何んか悪い聲で語られても褒めて機嫌能く返さなければ成らん中には弟子の内では師匠も一人者だよ由てと云ふ野心から優しい言葉の一ツも掛けられるのを樂みに通つて來るおかつの了見では 勝何卒宜い旦那を一人も揃へて足ん成たら自分の氣に入れた人を金で買うと云ふ精進だから今の處では中々若い者の手に落ちる處では無いけれども萬遍無く伊世辭を振捲くから毎晩の様に鮎を買とか餅菓子を買とか何かしら食物が遣入り升から幾分か稽古盛つて居るのでございませ爰に大工の棟梁で同町内に又兵衛と云ふ人

二百三十一  
があります年齢はモ一六十に近く威勢の好い大工さん大層お勝が愛嬌の  
あるので肩を入れて呉れ色氣も何もありませんが唯肩を入れて  
呉れるので月潔ひにも床が無ければ無味いから私が床を拵て遣る那處が  
悪いから直して遣らうとか云つて深切な面倒を見て呉れますからお勝も  
此棟梁を大事に爲て居る然る處爰に其淺草材木町に伊勢屋太左衛門と云  
ふ大きな材木問屋がござい升十一月の事で十五日には家の娘の祝日で皆  
伊親類方を家へ招待を爲さければ成らん太左衛門又兵衛を呼んで 太  
て棟梁和郎に聞たいことがあるが 又何んで座います 太お前はア  
屋敷の旦那方を權門々々で伊連れずまて伊料理屋へ往つて伊酒杯を上げ  
ては馳走爲て伊出でなさる伊存と通り十五日は娘の祝を爲さければ成  
らん親類の方も皆伊出でなさるんだから藝者でも何人か呼ばなければ成  
らん私は其方は不得手だがお前一ツ好いのを指圖しては呉れまいか 又  
何うも旦那様の前でゲスが此近所には誠に年の若い美麗なのは有り升が

藝の好いのは少のふ伊座い升から伊親類に對まて却て間の悪い思ひを被  
爲らんければ成りませんから幸ひ爰に私の町内に端唄の師匠でゲスけれ  
ども小歌勝次と云ふのが有り升是は何うも中々藝が好ふ伊座いままて女  
も好し年頃も好し随分品行の好い者でゲスから此家へ私が往て頼みませ  
う 太然ふして下されば夫れに越たことは無いが……決てお酌は爲せや  
ア爲さい家に入りの者の娘に美麗かがあるから夫れに頼まて夫れ  
では何卒願ひます 又畏参りまえて伊座い升夫れでは頼んで連れて参り  
ませう 太棟梁何分願ひますと云ふので又兵衛承知爲て又兵衛歸り掛け  
に東仲町のれかつの處へ来て 又師匠外の事では無いが私の出入場に伊  
勢屋さんと云ふ材木問屋がある其處の家は十五日の祝ひがある就ては何  
卒當日はお客が来るんだが客の唄うのに調子を合してさへ遣つて呉れ  
ば宜いんだが一ツ往ては呉れまいか 勝誠に有難ふ座いますが妾で伊  
間に合ひ升か知らん 又間に合ふ處では無い和女から大悦びあんだから

……私が自慢を云つて来て仕舞つたのだから和女一ッ往て下さい 鷹夫  
れでは伊役に立つか立まいか知れませんが参りませうか弟子さんの方  
へは能くは断りませう置ませうからと其處で弟子が来た處で 鷹十五日  
又は棟梁のれ供を爲て材木町の伊勢屋さんへ行かなければ成りませんか  
ら何卒十五日の晩一晩休んで下さい十六日には二日振お稽古を致し升か  
らと弟子へ答へて置て當日も成るとお勝は髪を結び湯へ進入つて悉皆化  
粧を爲て衣類を着替へ夕景を待て居りませぬへ棟梁又兵衛結城袖の衣類  
に羽織を着て博多の帯を締め懐中を大きく爲て遣つて参り 又サ師匠何  
うか一緒に往て下さい是から伴はれて材木町伊勢屋太左衛門へ参ると  
モ一お客様方はお揃ひで有りませぬヤレ兩國の旦那本町の旦那大門通り  
の旦那と云ふ大町人方の主人方で二階にモ一ッと五十斗り竝らんで居  
るモ一既に酒が始まつて三人の間に一人位は宛の割で出入の者の娘が  
今日を暗れと着飾つてれ酌を爲て居るモ一お客様方も内々三味線を待て

居る處へ又兵衛がお勝を連れて二階へ上る太左衛門は袴羽織で亭主役で  
座いますから那方此方と奔走爲て居り升 太イヤ大きき棟梁伊勢屋様  
能く連れて来て被下た……サ、師匠此方へ 勝「伊勢遊ばせと云つて其處  
へ出て一同又挨拶を爲る 太「は、統の衆何うも待遠でございませぬ漸  
々師匠が参りませぬ此處で一同の衆もグツと陽氣も成て各々からおかつ  
にれ盃を下さる太左衛門が 太「サ、皆さん三味線の音を入れて伊勢かに  
……お師匠何分願ひ升 勝「畏まりましたとおかつが回顧つて見ると其  
處へ三味線が三挺出て居る太棹に中棹に細棹何れも皆上等の品でござい  
升何れでも好きのを伊勢ささいと云ふやうに爲て伊座い升おかつ自分  
に氣に入たる處の三味線を取て調子を合して何か尽く目出度い伊座付を  
付けるお座付が濟んで仕舞ひましたら三下りの二ッ三ッも遣りませぬ  
勝「サ何か伊各々に伊遣りませぬと云ふ事も成る旦那方だからと云つたつ  
て皆隠し藝の一ッ位いはある者で各々不味い乍らも頼りませぬを爲

二百三十六  
 て唄ひあさるのが更に三味線に合ふのもあり升る然ふ斯ふ爲て居る内に上座に居りし年の頃五十三四に成りますデツプリ爲たは老人一昨日立つ身拵でございまして先づ是丈け出でさる客様方がエ、薬研堀の旦那薬研堀の旦那と外のお客様も一目見て居るやうさ方 甲「何卒一ツ薬研堀さんの越中節を願度ふ存じ升あア 乙「左様先刻から待たして居りました……何卒一ツ旦那願ひたいもんですが……扱て己れの出来る者で好める物をば客方に懸望爲れると云ふものは心嬉まいもので 薬研堀「イヤ誠な御聞苦しいが……然らばお師匠に一ツ願ひませうお師匠さん誠に一ツ恐れ入たが何卒越中節何んでも好いが一ツ彈て下さいおかつが 勝「何も私も六ヶ敷いものは出来ませんがやまゝい物で宜まれば一ツ二ツ心得て居りますから 藥夫れでは何卒 勝「何んに致ませうと爰に相談を爲て豈夫れ勝も越中節だからと云つて矢鱈に人の遣り升る淺間だの八景だの神路だのと云ふものも彈れませんか 勝「何うか夫では旦那様

會我的遺物分でも願ひ度う存じ升夫れで無ければ……石枕でも……旦那も大層六ヶ敷い物を選んでと思ふけれども 藥然んから石の枕を遣りませう此越中節の石の枕と云ふのは淺草觀音乳母ヶ石の由来と云ふ大變に六ヶ敷い長いものでござい升此長い奴を遣られては席上の客人難遣一方成らぬが然し乍ら是れも浮世の義理だと思ふから我慢を爲て聞て居る旦那は一生懸命に小額な青筋を出して鳴る扱てお勝が充分な三味線を與て遣つたのが盡く此旦那の傍意に叶ひ頻りに旦那はおかつの方をヒョイ見るとお勝の方では 勝「先づ此中での第一等の客と目を注けた注けられたるは客様こそ災難 藥「旦那が小便と云ふから 勝「お附アし升るとお勝が付て便所へ行く出て来て水を掛けて遣り自分の懐中から手當貴を出して 勝「是でお拭遊ばせと出す 藥「お師匠さんお前さんは何處で勝「妾は東仲町に居ります 藥「お宅へ参いつても宜うござい升か 勝「入しつても宜しう傍座い升が誠に汚苦しい處では座い升から妾宅の直さ向ふ

二百三十八  
に柳川と云ふ家がございますから其處へ旦那は遊び入しつて呼んで  
して下されば妾は参ります何卒入しつて下さい 藝夫りや〜然んから  
明日も行くも好いか 勝宜まうござい升ども何卒明日乾度入しつて下  
さいと爰も言葉を番へて其晩はお勝は上々の首尾で大層頂戴物杯を爲て  
立歸る翌日又成て 勝明日約束を爲た旦那が來れば好いが……と思つて  
居り升ると正午少し過たる頃をいに柳川の祥天を着たる若い者が來て  
若エ、お師匠さん鳥渡何卒お出で被爲てお客様でグスから 勝何んさ  
方で座います 若左様でモ一五十四五に成被爲る誠には人品の好い  
旦那様供を一人連れてお出でございました 勝ア、然ふですか唯今直  
に……と悦んで鏡臺に向つて薄化粧を爲て腹を抱へて柳川へ出て参りまし  
てお供さんは下座敷に居るから二階の座敷へ案内に連れて這入ると紛ふ  
方無き昨夜の侍客 勝ア旦那能く來て被下た有難ふ存ぞ升 藝師匠マ  
ア先刻から待たして居たか昨日は失禮マア……何は無くともと云ふん

二百三十九  
で是から浮馳走に成るは酒が廻つて來るも從つて何うか世話でも爲たい  
やうに云つて下さる其處でお勝は大きに悦んで 藝誠には足はぬ妾の様  
者を貴郎が其程に被仰て下されば是に越たことはございませぬが此福井  
町二丁目に大坂屋喜八と云ふ者が居り升其者が妾の兄で座います妾は  
モ一願ふても叶はぬ事と思ひますが兄が亦何んど升か何卒座の  
時に兄へ一言話さ下さるやう願度ふ存じます 藝ア、宜しい早速是か  
ら往つて兄さんにも話せて見やうと爰で土産物をお勝にも呉れは祝儀をも  
呉れ會計を濟し立派ある折を拵へさまで供の者に持たして是から福井町  
の大坂屋へ尋ねて参る抑も此旦那は何處の人と云ふと兩國藥研堀に居つ  
て水谷權兵衛と云ひ公儀の金子御用を遣て居りませぬ金満家の大旦那で  
座います却福井町の大坂屋へ來て喜八に面會を爲て 權外の事でも  
無いが妹子の事で來た昨夜材木町の伊勢屋の家で目掛つたが誠  
は様子の好い方今日も目掛つて色々話しを爲て何卒妾も別段に年を

取て樂みも無いが鳥渡妾宅の一軒も拵へて遊びたいと浮話しやめた處が  
兄さんの浮思召もあらうから兄さんが何んど云ふか兄さんさへ承知を爲  
て被下れば願つても無い事だど斯ふ被仰るが兄さん何う云ふ物でござい  
ませう實は今日浮相談に參つた次第でと聞て喜八は其人を見るに身拵の  
拵ひと云ひ亦持物と云ひ何うも行届かん處は無い何う見ても大家の大且  
那喜八は心中に 喜流石姐浮の事大したものを一ツ引掛けたあと腹の  
内に悦んで 喜何うも且那樣有難ふ存じまそ那れも私の妹でございませ  
が唯今迄去る浮大名に奉公に出まて置きまえた漸々の事で此頃浮暇が出  
まして早く亭主でも持たして身を固めさせやうと存じて居りまえたが何  
分藝が好で少との間で好いから人にお師匠さんと云はれて見たいと云つ  
て幾ら止ても聞かせんから詮方が無い永い事では無し半年か一年自由に  
爲して於て其内にマア氣に入れた者でもあつたら亭主に爲て遣らうと思つ  
て居る位い當人が好き手りに那樣お真似を爲して置き升然しマア屋敷に

奉公爲て居たいけに何んも存じませんけれども作法を粗暴に致しませ  
んから其處だけがマア那奴の取得でござい升から 權イヤ夫れはモ一兄  
さんの浮言詞が無くとも私は承知爲て居る其禮義作法の正しいには腹服  
を致し必ず浮屋敷奉公を被爲ては出で被爲たのだらうと存じて居ました  
累卵の事で頃日八丈は殿から下つた斗りの奴爰で喜八が承知致えたる事  
ゆへ權兵衛も大きに悦んで 權何うか何んお家でも一軒持て進たいと  
金子は水谷から出まする事故喜八がお勝の處へ往て相談爲て東仲町は  
ン黙で引拂つて仕舞はなければ不可いからと喜八是から問さへあれば  
おかつを連れて日の内は弟子も來ねへから探して歩くと淺草花川戸に鳥  
渡爲た家が浮座いました先づ此家されば宜まからうと家主へ往つて相談  
を爲まえて昔の事でございませうから百兩斗りの家……方今お高大きも  
ので其家を百兩で買込んで且那樣かられ金子も出る事ゆへ充分に手入を  
爲て東仲町の方はナン黙で取片付けて仕舞つてフイと移て仕舞ひません



二百四十二  
と弟子が跡を慕つて来るから夜逃空様に花川戸の家へボンとあかつは引  
移る此處で薬研堀の水谷權兵衛は夜あゝ其花川戸の家へ遊びに来さま  
やる女は氏無くして乗る玉の輿と云つて實に出精の早いもの今は小女を  
一人使つて何んにも別に用とては無い己れの身軀を美麗と爲て白粉でも  
付けて旦那へ見せるのが今日の役でございませうされば水谷權兵衛は己れ  
の充分氣に入たる女を圍つたので有りませうから繁々通つて来るやうあ次  
第だに由てあかつの言成放題に成るお勝は幾分か懐中が暖く成て來ると  
昔が出て参りますから茲に今戸の鏡師の伊之助と不圖爲た事から妙あ交  
情に成り是が手違ひに成るのは話し……

第十七席

却説唯今の處ではあかつ此上も無い樂を致して暮えて居ります下女の  
お竹が或晩の事竹お内儀さん誠にマア貴女へ私は浮座い升此  
程仲見世の寄席が大變這入るやうで有りませうから一晩旦那の浮出での

い時よ、連つてつて頂きとふござい升 勝夫りやア連れて往ても好いが誰が  
出て居るんだい 竹義太夫でございませうよ 勝誰…… 竹播摩太夫と義  
豊で浮座いませうけれども大入でございませう爰に播摩太夫と云ふ者は當今  
の播摩太夫は元の紋左衛門彈語りを爲て居た人で元義豊と云つて上方か  
ら來て永年東京で今賣人でございませう此前の播摩太夫と云ふものは元越  
太夫と云つて近頃の名人其前の播摩太夫唯今より三代前の播摩太夫と云  
つた人で其人の話までござい升三味線彈を義豊と云ふ義太夫第一等の名  
前でございませう扱てお勝が 勝夫れでは先刻旦那の處から浮手紙が來た  
よは二三日浮屋敷の方の浮向で行かれかいから心配を爲るかと云ふ事  
だから是から行かうか 竹然ふでござい升ねへ然ふ成り升れば夫れに越た  
ことは浮座いませう 勝夫ではお前仕度をおし其處等を美麗にお片付け  
よ 竹長まらましたカア……と片付ける 勝然ふも急がまい  
で沈着でお片付けよ女中は速しく取片付けて火の用心を爲て二人共仕度

二百四十四  
を爲て戶外へ出てカラリピツタリと戸口を締て鏡を下して出て参りませ  
誰が見たからつたつて立派な商人のは新造と云ふ拵いで段々遣つて参  
り淺草仲見世の西の宮と云ふ寄席唯今金龍館とか云ふ宿屋のあつた處二  
階作りの寄席で座います來て見ると大入に付は客止と云ふ札が下つて  
居り升の竹「チャ」お内儀さん客止で座います 勝「不可あいなへ  
竹」然も妾が聞て見ませう……一寸下足さん何うでいませうか二人道入  
れませうか 下足「へエお二人位ひ詰て詰られぬ事は座いますせんマは  
上んおさいまし是から座料を拂つて 竹「お内儀さん上んおさいまし  
道入れるううでございませうからと二人二階へ來て見るとギツナリ詰つて  
居る中賣の女が 女「此方へ被入まやいませし何うか判込みぬ事は座  
いませんから蒲團を二枚手に持て客の中を割て行く 女「アノ鳥渡貴郎  
濟みませんけれども此處へモ一歩二人さん入れて下さいませし 甲「不可あ  
いやさ」込合つてる處を仕様が無へさア 女「然んも事を被仰らづに賢

二百四十五  
郎は窮屈でも座いませうが入れて下さいませ……お内儀さん此處へ入しつ  
て……客がヒヨイと見ると頗る付の別嬪だから 甲「サ、此處へ出で  
あさい少々膝の上へ乗ても宜う座い升から 勝「免遊ばせ誠に濟ませ  
んと座る下女のお竹も其處へ 竹「免おさいと座ると此方の客が 乙、  
エ、大さお女が來やアがつた二人乗のホロ位の尻が有ると盗まて居る其  
内にモ一切前の淨瑠璃が濟んで愈々播摩太夫と義豊が上りままた播摩太  
夫と云ふは年齢五十六七でございまして義豊と云ふ三味線彈は未だ三十  
四五でございまして古今の美男三味線が滅法鳴手で座います掛掛は夏  
く五月颯々無え大また腕でございするに由てお勝は自分が出来る人で  
座座いますから 勝「此三味線は中々大したものだ旨マイとろの義豊へ思  
ひを掛ける其腕は愈々打留に成るドロ」客が歸るから 勝「竹や成丈  
け遅く歸る方が好い 竹「然もでござい升ともお頭の者でも扱かれると不  
可ませんからと待て居りました大抵モ一歩客が出切た時分におかつは候

浪白噂化文

中から金子五兩出まて二兩二分宛ニッ包んで 勝れ前樂屋へ往つて  
此金は義豊さん是れは皆さんへと云つてお出しヨと二包の金子を渡して  
遣るれ竹は是から樂屋へ参りまして其金子を渡して来る二兩二分義豊と云  
つて二兩二分一同へと云へば義豊の浮客と知れて居ります是で義豊が先  
へ立て播磨太夫及び切前三前其處へ出て参りまえて 義お家はん唯今は  
有難ふございます 播浮家はん只今は有難ふ存じます何れも皆上斗りで  
浮座い升からお内儀さんとは云はさいお家はん〜と云ふ大勢其處へ  
に出で参りましたから 勝ヲヤ何んで浮座い升ねへ浮町噂に……サ、何  
卒那方へ入しつて下さい竹や踊りませうと竹を連れて歸る跡で太夫さん  
の方では 播イヤ義豊さん滅相好い浮家はんあア美しい方やあア 乙義  
豊さん浮樂みやあア〜と云つて義豊は大勢に嘲弄れる扱て其翌晩に成  
り升ると か竹や 竹ハイ か今晚も行させう 竹ハア有難ふ存じま  
す今晚はお内儀さん切は逆橋でございます逆橋は三味線が好うございま

浪白噂化文

すから 勝ヤ行させう是から鼠狐々々に家を取片付けて昨夜よりは早  
く参りまえて未だ浮客様も然ふミソリ遣入つて居りませんに由て好い  
處へ座つて口語りから二枚目三枚目迄で聞て三枚目を仕舞ふと云ふ時に  
勝竹や妻は歸るヨ 竹ヤヤア何んでございますねへ貴郎是れからじや  
ア浮座いませんか 勝何んだか私しは今夜頭痛がするし目舞がするよう  
だから歸ろう 竹大方大入だから逆上たからて浮座へませう浮心持が惡  
るければ浮歸へり遊ばせ 勝然う爲ませう下女のお竹も何うも爲方かあ  
い主人の云ふ事だから不承無性に二階から下りて参ります下足が下  
大層早ふ浮座へますあ 竹浮心持が惡いと被仰るもんですから 下左  
様でござい升かど穿物を直す職て下駄を穿きながら 勝竹や樂屋へ往て  
一寸義八さんと云ふ人に顔を貸して下さいと戶外迄浮連れまして浮呉れ  
竹畏まりましたとお竹は樂屋へ行くおかつは下駄を穿て表へ待て居る  
竹お内儀さん只今浮出でに成り升から夫れじやア少し爰に待て居りませ

う。二人の者が待て居る處へ義八は着物を着替て来て見ると昨夜お祝儀  
を戴いたる伊客人でござい升から 義八「お家はん昨晚は有難う伊座いま  
す 勝「誠に貴郎一寸一緒に濟みませんが来て被下まし 義「長ましました  
と那れから伴見世から馬道を通つて向ふへ被ける花川戸も程近い處でと  
さいますから家の前まで来て 勝「此處が妻の家で伊座い升から今晚寄席  
が伊仕舞ひに成りましたらば何卒伊師匠さん丈けを伊連れ被爲て遊びよ  
被入つて被下る譯には参りませんか伊連様を伊連れ被下ても大勢さんで  
は世間知れますから貴郎と伊師匠さん丈けで伊出で被爲て下さいませ  
義「有難う伊座います夫れではお師匠さんを連れて参りますからエ、乾度  
参りますから 勝「ヒヤア那の袴子口の方で無い水口の方をトンと伊叩き  
被爲て被下ると此者が明け升から……と金子を二百疋包んで遣はす悦ん  
で義八は歸る直よ是れからお勝は竹よ云付けて酒肴の趣向を爲て今に來  
るかど待て居ります其内に四ッ少く過ぎたる頃をいに成りますると

チャラ〜と雪踏の音が聞へる竹は水口の處へ来て暫くの間待て居る處  
へトンと當つたから 竹「只今明けますと水口をガラリと明ける 竹「ア  
何卒此方へ〜と云ふ 義「免下さいと是から義登が先へ上る義八は細  
長さ處の小田原提灯の燈火を消す直ぐに竹が穿物を片付ける 勝「何卒  
此方へと云ふ座敷へ来て見ると何うも光々たる伊座敷でふいますモ一敷  
物が敷いて具餘の燭臺も燈火が点て居りますを義登が其處へ手を突て 義  
「お家はん昨晚は有難う存じます 勝「イエモ何うもは禮で恐れ入ります  
何んも有りませんけれども伊師匠さん一口口進どうござい升から何卒  
召上て下さいまし……貴郎此方へ入つしやい 八「お家はん昨晚は有難う  
存じますと義八が禮を云ふ是から道つたり取つたりモ一九ッ半頃をいに  
成りました 勝「竹や和郎は亦明日の朝眠いから構はづは寝よ 竹「夫れと  
やア鳥渡那方を仕度をして参りませうと何か立歸いて居りましたか其處  
へ出て来て 竹「妻は先へ伊免蒙むります……ア貴郎方伊然遊ばし

と下女部屋へ進入つて寝て仕舞ひまする跡は、お勝と義登と義入の三人  
も飲んでる内にお勝は段々酒が廻つて来る幾分か昔まが出て参り升から  
言葉が酔あいの内とはガラリと變つて優い言葉を使つてる奴が段々言葉が  
うんざいに成て来る 勝「マア、勝然、勝師匠さん飲んで遅く成たら泊つて  
でもは出でささい……ねへ好いじやア有りませんか」と云ふ言葉に少ま  
豊も怖く成て来たど見へて 義「義入や 義入、ハイ 義ア、ノ一茅場町の且  
那はんの處は今晩巡行だ其巡行をガラリと忘れて仕舞うたが是から往た  
ら間又合ふだらうかア義入も考へ 義ア、一然ふで勝座いままたあア巡  
行は貴郎はん夜の明る迄でござい升から鳥渡是れから行なすつたら間に  
合ん事はありますまい 義「然ふださ……アね家はん誠心濟みませんが茅  
場町の旦那はんの處へ巡行があり升るでこれから鳥渡往て遣りどふ勝座  
いまするが 勝「ア、然ふでございしましたか夫りや」 然ん事少とも  
存じませんだつた妻も越中節は随分苦ましましたが矢張巡行と云ふ事が

ありまするが然ふ云ふ處ではお前さんの三味線が無くつちやア困るでせう  
からサ、早く勝出ささい仕度をおしささい……ナニをまこく爲て居る  
んだい提灯でも点ねへさ義入奴勝爲てキヨロく 眼で燈火を付ける  
義入「サ、お師匠さん参りませう 勝「勝物は這の傍に上つて居るから水口  
から出るんだヨ 義「へイ……有難うござい升義入泡噴て水口から出る時  
に頭ア打付けて 義入「ア痛た……勝「エ、氣の利ねへ野郎だまア上方  
録ア 義「ハア……と勝を流して二人共逃げて仕舞うツ、と立て往てヒタ  
リと戸を閉め錠を掛けてお勝は 勝「上方者は仕様が無へ江戸子を見ると  
ビク／＼爲て居やアがつてカラ話まにも何んにも成りやア爲ねへ鳥渡小  
粹お野郎だと思ふから遊んで見やうと思つたが何うせ江戸子の前よは  
合ねへ藝人は面白く無へあア何う爲ても遊樂を爲た奴で無くつちやア  
齒に合ねへと御言を云ひ乍ら戻つて元の座へ直り徳利を銀瓶に突込んで  
馳て引出え大さ湯呑の方へツツと注て向ふは寝るやうに成てるんだか

ら四疊半へ轉り込んで寝る分よやア構はきいからグツと一杯引掛てる向  
ふの四疊半よ二枚折の半屏風が立て居る下女のお竹が寝るやうよ爲て置  
たのだから群内の蒲團に黄八丈の掻巻が掛けて敷てある枕許へ煙草盆に  
火が埋れて銀の水入よ水が這入つてチヤンと枕許へ置てある其四疊半の  
座敷でもつてボンと煙管で灰吹を叩く音が爲る流石豪腕の悪婆もギョッ  
と爲て勝ハテ誰も居る氣支へ無いが何者だらうと左りの手に朱呂宇の  
煙管を持ってヌツクリ立上りおかつが四疊半へ這入り屏風の上から燈火を  
出えて覗いて見ると群内の蒲團の上に仰向けに寐やアがつて黄八丈の掻  
巻を鼻の上まで掛けて大きな目を閉て居る枕許の灰吹の中からフツツと  
煙が出て居る勝何んだい喫驚させやアがつてお前は何處から這入つて  
來たんだい天から降て來たのか地から湧ていも來たのか妙お奴じやア無  
へか人の家へ來て寐込んで居やアがつて起ねへか男は何んども云はねへ  
掛つて居る掻巻を足でボンと蹴除けてヌツクリ蒲團の上に起上つて枕許

へ置た三留の煙草入銀の達磨の付た奴を右の手に持ち眞鍮の煙管を左  
の手に提げクルリと尻を捲つて二枚折の半屏風を跨いて座敷へ出て來て  
火鉢の向ふへドツカリ座り込みままた身装は袖の茶飯盛の袷せに蚊焚白  
の單物を下へ來て八反の白纏を締め年齢未だ二十七八の若者でグス水の  
垂れるやうお好い男だ勝何んだお前は男小哥は兩國梨堀水谷横兵  
衛の隠目付でございませお前さんも水谷の旦那に永々厚恩を戴いて居て  
如斯くでもあるだらうと云ふので旦那が小哥を隠目付に付けて置た己  
が勝手の人何ぞを引摺込んで面白い遊びを爲ちやア済み升めへ夫じや  
ア旦那をへかべに爲ると云ふもんだ小哥は是から旦那の處へ往て是れ  
ど今夜の話えを申上げたら氣の毒だが明日ッから扶持の喧上だらうけ  
れども夫りやア亦魚心あれば水必話えに由たら亦内分に濟せやうから  
モお姐さん好い挨拶を爲てお呉んささいと野郎少し空回りで道りやア  
がつたお勝は朱呂宇の煙管でバクッ〜と煙りを輪に吹き勝ハテ、ン

お前は藥研堀の水谷の目付か乃公が藝人を招んだつて云ふのが何う爲たんだ……扶持の喰上げだど……巫山殿た事を云ふも乃公の身体で乃公が買うに何う爲たそんなさ爺いの機嫌氣様を取て居るのは己が勝手に口直しでも爲てへわらだ旦那の處へ往て話しを爲るんから何時でも往て話を爲て來い乃公の方から何卒世話を被爲て下せへと頼んだんでも何んでも無へ旦那の方から世話を爲てへと先方から云ふから世話に成て居るんだ別れも成りやア別れに成るで此方にも了見がある早速話しを爲て呉れ汝達の様も若い奴等に強面て脅かされる乃公じやア無へ今でこそ斯ふ爲て居るが一通は本所深川切て少しは人にも知られたる鬼坊主清吉と野書を取た惡黨の女房幻おかつとは乃公が事た別れん成るから臆度藥研堀へ其丈けの難儀は必ず掛けるから早く歸つて然云つて呉れど云はれて野郎を三尺手も後へ退り男姉妹も濟ねへ何卒勘忍まて呉んさせへ清吉兄イの姉妹と云ふ事はは聞ずしたから知つたやうさもの一向儀は知らねへ

こと誠を話ささけりやア分り升ねへが私は何を隠しゆせう此今戸に居る鏡師の伊之助と云ふ者藥研堀の水谷の隠目付と云ふのは眞赤さ偽言實は此頃三味線堀佐竹の屋敷へ好いのが出來て居りまそもんですから毎日佐竹の屋敷へ遊びに参りまして此二日三日は出來が好くねへから正午過に歸つて來て此筋向ふの湯屋へ参り湯から上つて二階に茶一杯飲んで居りますとお前さんが先へ立て下女が後から湯上り浴衣を抱へて出て行く處を見てア、好い女だマア………浮免なせへヨ那りやア何處の何んぢらう斯ふ二階の女に聞くと那の方は直き筋向ふの格子作りの内に居る兩國藥研堀水谷權兵衛と云ふ大家の旦那様の團い者だと斯ふ聞ままたもんでそれから姐妹の前だけれどもア、云ふ女を一ツ取捕へて未だ一遍も強淫を爲たことは無へから強淫を爲て見やうと實は來たやうを評でお勝が氣味の悪い奴ださア男實は昨夕此處へ來て居た處が伊家に誰も居ねんです何處へ往たかど何時迄待ても帰りが無へから遂々北廊へ退込んで仕

舞つて今夜来て見ると今夜も居づは待すして居る内にか前さんは下女を  
連れて帰らんあすつて何んだか混多〜爲て居る様子はから小荷は裏の  
塀を乗り越て庭へ這入つて様子を窺つて居ると藝人が二人這入つて来て酒  
を飲んで然ふ斯ふ爲て居る内に下女は寐るし組はが大言ア切て居る内  
は藝人が驚いて水口から飛出して歸つて往たやうすだから庭口を一枚明  
けて座敷へ這入つて先刻から横に成て居たやうさ譯さんです何うも清吉  
兄イの姐と利ちやア冗談一ツ云ふ事は出来ずお前さんには始先ていけ  
すが兄哥には小荷も傳馬町の東の大牢で色々怪厄介に成た事がございま  
す佐渡へ行きあすつてから島を脱たと云ふ事も聞まされたが其後は何う被  
爲たかと思はねへ事は多座いせん其大恩のある方の姐とは知らづに  
如斯ことを爲まえたが今迄ん處は何卒多難被爲て浮吳んなさい 勝ア  
、然ふかい乃公ア亦然ふ云ふ事とは知らあかつた全く隠き目付かと思つ  
たから昔を一ツ出したやうさ譯ア、好いやな然ふ事が分りやア一杯飲み

ねへさ 伊何うも濟ません 勝少と是から遊びに来ねへさ亦好い話しも  
有るせ 伊有難ふござい升是から伊之助ヲヨク〜遊びよ来て居る内に  
深い交情も成る扱て是れが好い鹽梅に五六ヶ月の間は知れづに居りまま  
たが遂よ水谷へ知れて別れに成る爰でお勝が水谷權兵衛の見世に座つて  
ゆすると云ふお話し一寸休息致しまえて上げ升

第十八席

エ、折々伊之助は忍んで来てはか勝と相引をして居るのを藥研堀の旦那  
は更にこれを知りません旦那の居る時に伊之助が来れば水口の方へ来て  
毎晩トンと當る事にあつて居るから下女のお竹が臺所へ来てエヘンと咳  
拂ひをする其咳拂ひをえた時には旦那が居るんだから伊之助は吉原へで  
も往つて遊んで仕舞ふ尤も吉原へ往つたとして己れの體を一枚一本に賣る  
分には何時道入つて往つても困まらない伊之助今夜は居あからうと思つ  
て臺所へ来て當ると 竹エヘン 伊オヤ又たかい其晩吉原にでも行て



二百五十八  
染の所へ往つて寐て又明くる晩やつて来てトンと當る 竹エヘン 伊能  
く塞つて居るお感心に爺め每晚來やがるどコボシ〜歸へる爺さんの夜  
る居る時は晝に來て遊んで酒でも飲んで屋敷へ出て來て毎日マア慰を去  
て捕られしやお勝の所へ來て幾らか拵れいて呉れると廻がるれ勝も固よ  
りうれしやの女房互に覺ひのある事故決して嫌どは言はさい伊之助の云  
ふおりに金を持たして遣るまた伊之助だからと云つて悪るい時ばかりあり  
やまさいから宜い時には姐伊斯云ふ物があるこれは新形物だから丹前  
に去て着たら宜からう何にして着たら宜からうと反物の一反も毎日食ひ  
物の甘い物を持つて來る下女のお竹にも着物の一枚位ついても拵へて遣る  
のは年は若いけれども中々感心お奴今晚は來る氣遣ひは無いと或る晩の  
こと廿く二人で下女を寐かえて飲んで居ると夜の九ツ時分ドン〜  
ど人足がして其處へ駕籠が下りると 權ア、此處だ〜 駕へいと云つ  
て駕籠の垂を上げる 權そこを叩いて呉れ 駕へいドン〜

二百五十九  
イ 駕旦那がお出で被成つて旦那様がお歸りですよ 勝ハイ今開けます  
よ……伊之助さん歸いて來たよ 伊困つたさア何う仕様 勝仕方が無い其  
所の押入へお這入りお伊之助は片の方の押入を開けて這入る表では待遣  
うまいから 權勝や 勝ハイ只今開けます 權早く開けおよ 勝ハイ只  
今お待ち被成つて……と漸々に上り口へ行つて鍵を外し格子をガツ〜  
〜 勝大變旦那通うは座いしましたねい 權イヤ大きに運くさつて……  
駕籠屋大きには苦勞だつたさア 駕へイ難有う存じますと駕籠屋は行つ  
て仕舞う旦那は折を下げて這入つて來る 權エー…… 勝大層お酔んさ  
すつていらつしやること 權酔つて居るとも今日は柳橋の萬八の寄合が  
あつて夫から此方へ廻つて來たんだ 勝貴公萬八から宅様は直さじや  
ア座いませんかねへ 權イヤ土産物が餘り甘い物だからお前に喰べさ  
して遣らうと思つて土産がある手りで態々參つて來たんだ 勝左様では  
座いますか難有う存じますさ此方へ被入つてお一ッ召し上りませ 權大

二百六十  
 屑傲つて居るおアエ、…… 勝「ハイ 權誰が来たんだ…… 勝「實はお  
 向ふのみいちゃんとおのお隣りのきいちゃんを呼んで今迄此處で漂つて  
 呉れと言ひますから漂つて遣りまきて一つ飲まして二人を歸せまえた  
 權「アッ 娘子が酒を飲んで飲むかおア大層は馳走だのう此處よチヨコよ酒  
 があるが誰んだ…… 勝「ア、お向のみいちゃんがあるういけいと口を付  
 けずに歸つて仕舞ひましたんで 權「私しの箸をいれだして居るせ私しの  
 箸を無暗に人よ出しちゃ困るせい 勝「イ、エ使つたんじや伊座いませ  
 ん伊之助の野郎戸棚で聞いて居やがつて 伊「ア、爺の箸か薄汚ねいこつ  
 た 權「彼處にある入り口の雪踏は誰の雪踏…… 勝「ア、レハ悪意な者が  
 先刻参つて雨が降り出したもんですから下駄を貸して遣りましたから雪  
 踏を預けて参りましたんで伊座います 權「ア、レウか…… 此方は降つた  
 か兩國の方へは降らあかつたか大分意氣な雪踏だわア堅氣の人の穿く様  
 な雪踏じやアねイ…… 此時にはは勝も挨拶に困つて居るのを押入の中で

聞いて居た伊之助年が若いから堪らさい打入を突然開けて中から飛出し  
 伊「入釜まいやい爺め何をグヅグヅかまやアがるんだい人の家へ来やが  
 つて何を先刻から海事を吐いて居やアがる手前達にグヅグヅ言ひれて堪  
 まるもんか…… 宜いいけ年をしやアがつて…… ウ、チャツて置けく焼餅  
 がましい事を云やアがつて等に耻ぢて考げいて見ろ此の批犯の種め御突  
 を食つて水谷權兵衛腹を潰して下を向て居る伊之助は尙も勢説きくまを  
 するると向腰打拂うせ歸れく權兵衛少し人間が荒つばい様子である  
 から怖くあつたと見へて風流く折を提げて歸つて行く 伊「ヤイ惡張  
 り爺いめ折を提げて行さアがる置いて行け客番を食つて遣らア 權「難有  
 伊座いますと爺は驚いて角口飛出ま歸つて佐舞う 勝「伊之さん困るとや  
 アあいかお前何んだねい 伊「何んだつて仕様が無いじやアねいかおんあ  
 事を言はれて我慢が出来るもんか今日おんあ者が世話をして呉れねいか  
 らつて困る事はねいや伊之助も酔つて居るから大束極こんで居る 勝「そ

二百六十一  
りやア何も困りやまさい困りやまさいけれども今放擲つて仕舞うのもつ  
まらぬいとやアさいか 伊、イ、やま何を爲たつて此の位の暮まが出来ぬ  
い事はねへから心配なさんか 勝、何アに心配はまさい妾やア妾て是見  
があるから驚ろきやアしさいやね 伊、毎晩く、エヘンく、どか竹の腰掛  
斗り聞いて居あくつちやア成らぬいと其晩は酔つて此所へ大威張りで寐  
て仕舞う明くる朝まありますと權兵衛驚て福井町二丁目の大坂屋喜八の  
所へ行つて前晩の一條を是々斯々と並べて話をしたから喜八も實に驚い  
て權兵衛尙も語を續て 權、私の家へ彼の男が来て居つて乃公の家へ何し  
に來やがつたと云はれたので私も何んとも言葉の出様もさく既又抛擲で  
もされそうだから實は何んとも言はず歸つて來ましたもうく、お前のお  
妹子でも決まてお交際をなささいから其積りで居て下さい併し當人が悪  
いからと云つて唯私も此儘で別ると云と譯にも行かさいからどうか兄さ  
んお前からこれをお勝へ遣つて下さいと金を五十兩出しました 喜、マア

二百六十三  
旦那お氣の毒様では座います太い奴でげすそん事を仕やがつてお前さ  
んの顔へ泥を塗つて私が貴公へ向ける顔は座いません妹は私が養て食  
はうと焼いて食はうと勝手に座いますから私が今晚にでも往つて酷い  
目に遇はして遣ります事に依つたら川へでも持つて行つて深身へ叩ッ込  
んで目も遇はして遣ります 喜、うマア旦那御勘辨被成つて下さい 儘、イ  
ヤ兄さん短氣な事を被下ます私にもう金輪際彼處へは参りませんから  
家は仕方が無い彼も遣つて仕舞うと歸來て居りますから彼の家は宜様に  
被成て被下いと五十兩の金を旦那が置いて歸つて仕舞つた後で 喜、ア、  
犬に成つて大家の犬になれば能く云ふが流石は大家の旦那だあア彼の家  
を姐娣に遣つて仕舞つて金を五十兩置いて行つたが此頃聞けやア今戸の  
鏡師の伊之の野郎と好仲にあつて居ると云ふ事を聞いたがどうも仕様が  
無へもんで遂々破談に成つて仕舞つたが併し姐娣の盛見でする事だから  
乃公が何を云つたつて仕様が無が旦那の方はア、ヤッて置かなくちやア

濟まねいせれ此の金を遣つて置こうと喜八は五十兩の金を懐中へ入れて  
福井町二丁目を出て振ら〜花川戸のお勝の家へ遣つて参りガラッど替  
子を開けるとお勝は伊之助と二人で一抔遣つて居る所へ遣入ッて鏡師の  
伊之助は喜八に合はず顔が無いから逃げ様と思つたが逃げる所が無い彼  
方此方をグル〜廻つて居たか遂々雪隠へ匿れて仕舞つた伊之助め雪隠  
詰め食つちまやアがッた 喜お早うは座います 勝オヤ喜八さんは珍し  
う 喜今ほ膳かね 勝ア、逐朝寐をまたもんがから 喜へ、へ、へ、ハア  
イヤせつこいまやうと上かつて来てオ〜と奥へ来て 喜雪隠をお借りす  
まませう 勝イケナイ雪隠は今朝掃除屋が来て掃除した斗りて臭いから水  
口を出て向ふの裏へ遣入ると總廁があるから其所へ往つてお呉れ 喜乃  
公ア其後へ立てを嗜さかんで伊之助め雪隠の中でオヤ〜と思ひ乍ら喜  
八が明け様とする戸を内から押へて居るから開かぬ 喜伊之さん〜  
と名を呼んだ名を呼ばれて仕方が無いから放すと積が開いてギイと雪隠

の戸が開ました中で 伊ね早う 喜何がお早うだ、此方へ出ぬい乃公  
が彼處で話をして居る間お前が此所に中腰で居あけりや成らぬいそんき  
水臭い事をしぬいでマア〜此處へ来させい、手を取つて喜八は引つ張  
つて参り自分は火鉢の向ふへ来て座り 喜扱て姐今朝藥研堀の旦那が  
湯出に成つて昨夜の始末を確然お話に成つたが考へて見ると成程此方が  
悪いから妹を飛んだ事を仕やアがつて川へでも叩つ込んで仕舞うと斯ふ  
言ッて置いたがマアどうも出来て仕舞つた事は仕方が無い……伊之さん  
伊へい 喜昨夜の話の様子迄やアお前些ッと言ひ過ぎたせ 伊どうも面  
目次第も座いません一抔飲んで居りましたもんですから送わん事を  
云つて仕舞つて 喜人の家へ来やアがッて戯談た野郎だとか何んとか云  
つたそうだが此處はお前の家じゃあるめい 伊誠に面目次第も座い  
ません 喜其處で姐御今朝旦那が五十兩の金を持来て之を手切としてお  
前に遣つて呉れろと被仰つた此の家もお前の物だしもう彼の旦那の方は

手が切れたか今迄樂をした丈け得さ又一つ爲めに成る者を拵へるさ……餅  
し姐さんにも伊之さんにも言つて置くけれども清兄が佐渡を切り抜けた  
と云ふ事は聞て居るが今以て何處へ行つて居るか先が未だ分らぬいけれ  
ども古郷は忘玄難しと云つて何時歸つて来まいものでも無い其時斯ふ云  
ふ中に成つて居る事を知られた日にア兄哥の事てすからお前さん方を助  
けちやア置かねいから伊之さんも姐さんも能くそこいらを考へて成さら  
さいといけませんせ其場に成つたら兄哥の手で四ッにされる事と決心し  
てお出で下さい其時に乃公の所へ持つて来たらと云つて口は利かねい  
から夫丈けは念の爲めだから言ひ置くから克く其積で居て被下さい 勝  
喜八さん念の入つた事と云ふも仕方がない内の人が歸つて来て妾は命を取  
られたつて仕方が無いと覺悟をして居りますお念の入つた事で難有ふ  
さいます伊之助も側から 伊誠は難有う存じます 喜これ乃公はお暇  
を致しますマア二人で中能くお上んさい左様から 勝「オイト喜八さ

ん待つてお呉れお前に妾は色々世話に成つて引取迄頼んで置さ今此の金  
五十兩を私か貰つた所が仕様がないう妻も是で樂が出来ると云ふでもな  
から喜八さんお前に上げるから持つて歸つてお呉れ 喜馬鹿な事を云ふ  
私だから今困まる體じやア無しマア姐さん取つて呉んさい 勝  
お前も困らなければ私も困らないう妻だつて言ひ出された事は後  
へ引くのは嫌だから持つて往つてお呉れ 喜そんならお貰れいすします。  
と喜八は其五十兩の金を貰て立歸つて仕舞ままた 伊姐はそりやアお困  
りも有りませういけれども大變なことをしたじやアないかい五十兩の金  
を喜八さんに遣らさくつたつてどうか仕様が有りそうあるんじやないか  
い 勝「何にお前五十兩あつたつて樂が出来るものじやアなし藥研堀の且  
那に放擲れて五十兩斗りの手切れ金を貰つて事を済して居る妻じやア無  
いと是れ成りけりと三日四日経つてから朝の事一口飲んで仕舞つて 勝  
伊之さん今日は屋敷へ行くのかい 伊「行うと思つて 勝「今日は止まて家

に遊んで居てお呉れさ 伊「サウかい 勝「少うし妾は用があるから些つとの間だから留守番をして居てお呉れ妾は一寸用達しに往つて来るから其中に下女のお竹と云ふ者には暇が出たと見へて荷物を皆取纏めて其所へ出て参り 竹「何うも長々浮世話に成りまゝて難有う存じます勝は遠か包だものを其處へ出して 勝「これを持ってお出で 竹「そんなに敷いては濟みません 勝「イ、よマア持つてお出でけれども内の不始末を外へお公に往つても饒舌つて呉れては困るよと金を二兩遣下女は大きに悦んで宿へ下つて仕舞う 勝「伊之さん惣籠を一挺さう云つて来てお呉れさ 伊「オイキタ何處まで…… 勝「藥研堀まで上下ヒヤア無いよ片道で宜んだ伊之助は惣籠屋へ惣籠を一挺取へて来るお勝は鏡台又向つてふつり剪刀で頭の元結を刻てそいつをグル〜と只今で云ふ東髪の様赤梅に巻付けて手拭を被り前の所は櫛で以て押ひ櫛を黒文字で以てピンツツと留めて仕舞つてこれから髪を取り出してそいつを小枕の所からアツツと切り丁度

鬚髯の様な風にして其切つた髪を白紙又包んでこれを帯の間へ挟み置した 伊「オイ惣籠が来たせ 勝「ア、さうかい…… 惣籠屋さん大きに伊之助だつたねい 惣「へい難有う存じます 勝「さやア伊之さん家を頼むよ 伊「何處へ往つて来るんだい 勝「何處へ行つたつて宜ヒヤアないか今に宜事があるからどこれから惣籠へ乗つて馬道を出で中見世を真直にそれから藏前通を行つて浅草橋へ出で兩國藥研堀水谷権兵衛の家の所まで参りました 勝「ア、此處で宜いよヒタリと水谷の見世の前に惣籠か下りる何しろ公儀のお金汚用を務めて居る水谷の家で伊座いますから見世の若者番頭小僧がメラリと並んで居る所へ惣籠が一挺下りて惣籠屋が下駄を前へ出したのを見ると横証の下駄に黒絨の糸結が嵌つて居る借て女ださど見世の者が見て居ると垂をテヨイと上げた中から手拭を被つた意氣少年増が手を出すとグツと惣籠屋が引出して呉れる 勝「大きに惣籠屋さん伊之助さんだつたねい 惣「難有う存じますと惣籠屋は莞々惣籠を昇いて

歸つて仕舞お勝は見世へ這入つて来て 勝、伊免ささい 小僧、被入しやい  
まし、上り端の所へ来て、下り腰を懸て 勝、モ、旦那様は、伊宅で伊座いま  
すか、一寸、伊目、掛り、どう、伊座ります、小僧、へい、何方から、伊出で、伊座いま  
す、勝、妾は、淺草の花川戸から、参つたもの、一寸、伊目に、懸り、どう、存じます、  
小僧、へい、帳場に、居り、ま、番頭は、懸いて、それへ、飛出、来て、来て、番、これは、お  
出で、ささい、ませ、手前は、當家の、支配人、由、兵衛と、言、ま、す、者で、伊座、います、が  
何の、伊用で、伊出に、成りましたか、今日、主人は、不在で、伊座、います、ま、て、手前に、す  
し、置かれて、宜しい、事、あら、ば、どう、か、被、仰り、置、て、戴、き、どう、存、じます、勝、オ、ヤ  
番頭、さんで、伊座、います、ま、そ、か、どう、も、話、し、す、して、参、ると、云、ふ、譯、は、い、か、い、  
事、で、伊座、います、から、是非、旦那、さまに、伊目に、懸、つて、話、を、す、さ、あ、ければ、成  
ら、ない、ので、伊座、います、ま、そ、は、留、守、と、あれば、伊歸り、ま、で、伊待、ち、ま、上、げ、ま、せ、う  
番、ア、ハ、伊座、います、升、が、何時、歸り、升、や、確、と、相、分、り、ま、せ、ん、夜、に、入、る、こ、と、や、ら、成  
は、明日、に、相、成、り、ま、す、や、ら、知、れ、ま、せ、ん、で、伊座、います、から、又、どう、か、伊出、を、願

ひ、どう、存、じます、手、前、ま、で、被、仰り、置、いて、下、され、ば、主人、へ、通、する、様、に、致、し、ま  
す、勝、貴、公、に、す、して、置、いて、行、く、事、なら、す、上、げ、て、も、宜、う、伊座、います、が、些  
と、外、の、方、で、は、い、け、い、事、で、伊座、います、から、是非、お歸り、を、伊待、ち、ま、て、居、り  
ま、せ、う、今日、伊歸り、が、無、ければ、見、世、の、端、あり、とも、拜、借、して、一、泊、を、願、つて  
明日、ま、で、伊待、ち、ま、て、一、日、か、二、日、三、日、が、四、日、に、成、ら、う、とも、是非、伊目に、懸  
つて、参、りたい、ので、……、モ、番頭、さん、妾は、新、様、な、姿、に、成、つ、た、ん、で、す、もの、と、  
と、紙、へ、包、み、たる、所、の、髪、の、毛、を、其、所、へ、放、り、出、す、見、ると、一、尺、五、六、寸、に、プ、ツ、ツ  
り、切、つ、た、頭、の、毛、何、う、し、ても、頭、の、毛、を、切、つ、た、と、し、き、や、見、へ、い、番頭、も、少、し  
驚、いて、小僧、お茶、を、は、上、げ、す、し、な、小僧、へい、小僧、は、お茶、を、持、つて、來、て、お、上  
さん、お茶、を、伊上、ん、さ、い、ませ、勝、難、有、う、伊座、います、小僧、さん、是、れ、は、お茶  
かい、妾、ま、は、醬、油、か、と、思、つ、た、い、……、チ、ヨ、イト、番頭、さん、煙、管、を、買、し、て、お、呉、れ、  
番頭、煙、管、の、吸、口、を、チ、ヨ、イト、袖、で、拭、いて、番、へい、は、使、さ、い、と、出、す、は、勝、は  
これ、を、受、取、つて、一、服、詰、めて、バ、ク、リ、と、吸、う、と、煙、管、が、チ、ウ、ー、と、泣、いた、か、ら、其

處へ放り出して 勝、オイ番頭さん八文出して羅字でも燃んねいさデウ、  
言つて居るせ 番、へい女だが男だか口の利き様が分りません番頭も是よ  
は大きに閉口して旦那に内々で知らしたから旦那はッ、と奥から来て世  
見へ出様として長納籠の間から覗いて見ると手拭を被つて腰を懸けて居  
るのは過日來可愛がつて置いたるお勝では座いますから 權小僧、小僧、  
へい 權町内の頭を呼びに行つて來いこれから町内の頭吉六が飛んで來  
て 吉、何んでげす旦那 權、頭どうぞ此所へ來て被下實は斯うく斯う云  
ふ譯でと事の次第を話すとあんのろんな事は驚くには及びませんお前さ  
んが家迄持たして置て其上に心得違をまて五十兩と家を買らつて其上見  
世へ來てふ座るおつとはふさげた奴で浮座います能く有る奴でげす豈毛  
を切つて持つて來て手拭を取つて見ると満足で頭の毛の有るのは極つて  
居るんです長年乃公も斯ふやつて浮座負に成つてる浮恩返まに乃公が一  
つ充分な掛合て見ませうふさげた奴だとヒヨイと見世へ來て野鷹の間か

ら覗いて青くさつて奥へ戻つて來て 吉、旦那……… 權、何んです頭………  
吉、アノ見世も居る女ですか 權、ソウ 吉、貴公マア飛んだ者に引掛んさす  
つたねへ彼りやア大變な悪婆で浮座いますせ彼奴はお前さん以前深川に  
居て鬼坊主清吉と云ふ悪者の女房の幻お勝と云つて大變者で浮座いま  
す 權、へい………夫でも浮殿下りだと云つて彼奴の兄が申しました 吉、  
殿下り所か此間まで八丈島へ行つて居て漸く此頃八丈浮殿から浮下りだ  
が彼じやア旦那今之から例合手先から手先の方へ話しをまて捕縛つて繩  
を着けて引ッ張つて行ッたつて牢溜へ行くのは家へでも往く様に思つて  
居る奴つ悪くするとお前さんを抱込みませせ 權、抱込ひと云ふのはお  
んです 吉、お前さんを一緒に牢へ連れて行くんです 權、私はせうも牢は  
好かぬ誰だつて牢を好く奴は浮座いませんが 吉、こりやア何うまても  
金でげすか 權、棒にでも知れると仕様が無いからア金で納まる者んさ  
らば納めて下さい 吉、宜う浮座います乃公が往つて金で納めませうが金



と云へば旦那の前でげすけれども向ふで三百兩と出るのは極つて居ること乃公が口を利いても二百兩迄は遣らなくつちやア成りません此方は此の通りの噂大家じやア仕方が噂座いません 權何か宜い様に噂みませますと云ふのは是から裏口から出て往つて吉六が不意に見世へ寄つた様も見世の前へ来て今日は結構な天気で 番頭マア此方へ頭寄つては出ささいそれを幸よ見世口へ腰を懸けてお勝の方を見て 直さて姐さん何んだが知らぬいけれども商人の見世へ手拭を被つて女が腰を懸けて居ると云ふのは往來の人まで目に着いていけぬい乃公此の町内の為の吉でげす何んの噂話しか知らぬいけれども何んとか乃公が口を利きませうからお勝はハ、ア頭を懸んださど斯ふ思つかたら 勝夫では頭宜い様に噂みませます 直マア一緒に浮出でささいと云ふので其處に轉がつて居るの毛をお勝は紙へ包んで帯の間へ狭み頭と一緒は町内の料理屋の二階へ往つて易く負けてお呉んかせいと金に轉んだ話は極つて居る奴で

折角貴公が這入つたものだからそれでは三百兩は買ひやしませう大抵言ひ直か極つて居る 直乃公もそうとは思つたが何んにも云はすよ二百兩後の口を利くと互に赤い顔を見なければ成らぬいからマア二百兩に負けさせさいお勝は完爾笑つて宜う噂座いませ頭お前さんだから負けさせう外の事は何にも云ひませさいと直くに頭から金を取り寄せて貰ひ右から左へ二百兩を請取る 勝さて頭大きよ噂話に成りましたと其所を飛び出して酒屋へ行つて醬油樽一本に上酒を片馬頭の處へ遣つてお呉んかせいと云つて金を拂つて其足でマアと花川戸の家へ歸つて來ました 勝今歸つたよ伊之さん 伊何うしたい 勝實はこれくこうく云ふ譯で町内の頭が這入つて三百兩と切り出された奴をマア二百兩に負けて遣つた此金を取つては少し江戸は危険から當期の所は當地を去らさけりやア成るらいから何處へ往こう伊之さん 伊宜いども安すく此處の家を買つて仕舞はうじやアぬい其方か宜からうと云ふので賣家の札を出すと固より

意氣家だから直ぐ買手が付いた。依つて花川戸の家を乱し、賣り飛去。道具は皆んさ二足三文に道具屋へ賣つて残らずこれを金にまて首へ引ッ掛けて鏡師の伊之助とお勝は手に手を取つて何地とも無く逃げ失せました。借て此方は伊話替つて福井町の彼の大坂屋喜八は姐はが伊之助と逃げて仕舞つた。云ふことを聞ひて喜、マア、と云へば逃げた方が得くだらう。乃公も日用屋をして何うやら斯ふやら困らぬ様に成つたから家は清助に預けて往けば大丈夫だから。乃公も一つ故郷は忘じ難ま。大坂の様子を見て来やうかと頻りに國の事を思ひ出したから。喜八早速に仕度を致えて路金を用意致え。見世の方は清助と云ふ家の番頭に預けて一人旅の仕度を装ひ家を立つたのは喜八が丁度大坂から来た十二年目で。伊座います。東海道は別段上げる事も無く日よ歩み夜に泊り尾張の宮まで乗込んで参りまきて今夜は宮泊り。胸へ浮んだのは喜、マア、早いもんだ。此間だの様に思たが十二年後に乃公が大坂からお玉を連れて江戸へ

来ようと思つて来た時に桑名屋政五郎の爲り、女房まで取られて仕舞北上。下た街道の厚木の土堤で一旦殺され浮雲の所を助かつて大坂へ歸り。兄哥の清吉、大坂の平野屋へ小供を捨て、貰つて夫から後に宮へ来て女の體を二百兩の金で賣つて江戸へ往つたのは、最う十三年の昔夫から思へば人間も悪く成るものだ。今の所老やア喜八は廣世界も怖い者は一つも無い。何しろ今夜は桑名屋へ一番飛込んで、そうして幾らかの小金を使つて昔の女房お玉が何んか面をして居やアがるか。昔話でもしたら又た面白からうと桑名へ泊る量見で傳馬町へ乗込んで来る。喜、マア、此所の家だつたと思つたが……家は替りはしないけれども表の行燈に伊泊宿福島屋文助と云ふ看板が出で居るお向ふは和泉屋さん。はて何うしたのだらうと。其福島屋と云ふ家へ這入つて参り。喜、免被成今晚は伊厄介に成ります。女、お早いお着き様で伊座います。伊疲勞れ様で伊座いませうと女が洗足を取つて呉れる足を洗ふ。喜、姐さん、融と濟まねいけれども何うか測込みは

二百七十八  
伊免だに依つて小座敷を一つ借りたいが 女、へい下座敷が一つ明いて居ります此所で下の小座敷へ案内をする此所へ通うつて直ぐ茶代を遣る其所では茶が出るは菓子が出る 喜姐さんどうかお酒の好いのを附けて膳付きの外にお肴を附けて貰ひたい誠にお忙しい所へお氣の毒だらうけれども酒は一人で飲んで居ては甘く無いから一つ相手をしてお呉れか 女、畏りままた私の様者でも宜まければお酌を致ませう 喜結持だねい相手が無くちやア面白く無いからとこれから膳を持つて来てお酒が始まる喜八は彼の女を相手よして酒を飲んで居りましたが馳て紙へ二朱包んで其處へ出ま 喜姐さん寡いが…… 女、相済みません難有存じます 喜姐さん可笑事事を聞きや様だがお前さんは此所の家へ来て何年になり成るの 女、左様で伊座います妻は此家へ参つて當年で六年に成ります 喜ハア此處の家は元と桑名屋と被仰つた家じやア伊座いませんか 女、そうで伊座いますよ六年後に福島屋と替りまして桑名屋時分には居りませ

んでした 喜ア、そうか夫では十年の昔の話をまたつて姐さん伊存じ有りますまいか 女、イ、エ知らぬいことも伊座いません妻は直き先きの古町と云ふ所に生れて今年妻も三十に成りますから大底お事は存じて居ります 喜ア、そうかい元と桑名屋さんの時分よ十一二年後の事だが大坂から夫婦者で来て桑名屋の家に厄介に成つて女房を勤者よ致した事を知つては出でかい 女、存じて居りますよ妻は大坂から被入つた伊夫婦者の伊亭主さんは何んか人だか存じませぬけれどもお神さん以後に桑名屋さんのお神さんに成つては出でしたから存じて居ります 喜、そうかねい何う成つたんだらう 女、それがねい貴公妻は小供の時分では座いますけれども喜八さんと云ふ伊亭主はお神さんが熱者よ出て居るもんですから自分か小供の守りや何んかをまて毎日遊んで居ります云はトマア働きの無い伊亭主だと云ふので遂々貴公其喜八さんのを神さんが桑名屋さんの旦那と交情で仕舞つて全体阿の喜八さんと云ふ人は氣が利かぬいで

九人で伊座いましてねい 喜ハア……喜入も驚いた脱儀を取られたも  
願まで聞けば澤山だと思ひ乍ら 喜夫から何したね 女其中にお前さん  
其喜主と云ふのは一旦大阪へ歸つた大坂から何んだか悪るい者を引ッ張  
ッて来て大層お金をゆすつて行つて仕舞つたそうでは座います夫から  
後に其喜入さんのお神さんがお玉さんと云つて其玉さんと天下暗れての  
夫婦に成つて居らまつたけれども丁度今から七八年前の事で伊座います  
よ乗名屋のお喜主の政五郎さんは気が可笑く成つて嫌な事手り伊座成  
るもんでそれから夫で貴公嫌に成つたものと見へてお神さんは離り自分の  
物を纏えてお喜主を置去りにして此宿に遊んで居る博奕打の仁藏と云ふ  
者と逃げて仕舞まてそうまてお前さん大坂へ行くと其男を放擲つて仕  
舞つていまでは大坂で大層大きな家の番頭さんの國者どかに成つて氣樂  
をまてお出で被成ると云ふ事を聞きました其お前さん仁藏と云ふ男さん  
は驚ろいて宮へ還つて来て今でも此處に遊んで居りまそ離い女どやア

伊座いせんか 喜ム、そうか其野郎も離りくまたから最う仁藏とは  
行かねいと云つてゐるたろう 女貴公脱儀しちやア往ません 喜それどや  
ア女は今の所では樂をして居るんだねい 女大層大坂で善く暮して伊出  
で被成そうですよ 喜ム、伊喜主の政五郎と云ふのは何うしたい 女政  
五郎さんは病氣が快癒てからボーとして仕舞まして送々貴公借金に代に  
此所の家を取られて仕舞つたんで此福島屋さんと云ふのは借金の代も取  
つて後を斯う遣つて居るので何でも此程承はりますれば政五郎さんは伊  
勢の四日市で乞食に成つて居ると云ふ噂を聞きましたが夫も見た譯では  
伊座いせんか何んでも乞食だと云ふことを云ひままたよ 喜どうです  
かねそりやアくと噂を聞て其晩は喜入は床へ就いて仕舞まして借て明  
る朝に成ると會計を爲まて此所を出立致し伊勢の四日市に於て乗名屋  
政五郎が乞食に成つて居る所で面會を致ま是より大坂へ乗込んでお玉を  
斬るの一段……

第十九席

扱喜八は宮宿を立つて郷戸から船に乗りまきて桑名へ渡り桑名から四日市の松並木へ掛つて参りますと乞食が十四五人寄つて何か一文慰みして居りままた所僅かの錢から喧嘩始まつて大きい乞食が大勢で乞食を打ち擲いたりして居る所へ通り掛ると砂がパツパツ立つて臭くて仕様が無い喜コレ〜喧嘩何んぞをするかお錢遣るからと言ひますと中にも親方が有ると見へて親コレ……お通りの旦那様が被下と仰る喧嘩を止める 甲「難有存ぞます 乙「ハイ助かります 喜其んな事言は無くとも宜いやああさあ〜皆んあ爰へ来ひお錢遣らうと名々に幾等かづゝ道る 甲乙「ハイ〜難有存じます……助かりますと云ふ打たれて居る乞食は其所に倒れて居て来無いから 喜さあ〜お前にもお錢遣るが……何所か打たれたか怪我まや仕無いか……手を出しな 乞「難有存ぞますと手を出すとどきに喜八ヒヨイと顔る見ると何うも見た様だから暫顔を見詰めて居

りましたが 喜もしお前さんは宮の桑名屋さんじやあいか 乞「エイ……と言ふて顔を見たが十二年の昔しの事でも己の宅に永く置いた喜八の事だから忘れません 乞「やあ……お前さんは喜八さんぞや無いか誠は何うも面目次第いも浮座いません 喜何うもは氣の毒を譯ですさア實は私も今度江戸から久々で大坂へ往つて親類廻りでも仕様と思つて通り掛つた宮の宿お前さんの所へ久振りで泊つて昔譯までも仕様と思つて往つて見ると今は代つて福島屋文助其所で泊つて段々様子を聞いて見る所お前さんはお玉に捨てられて仕舞ひ五六年跡から宮を飛び出して此邊に何か餘韻て入らしやると云ふ事もちらりと聞ました然まどうも墮落たからと云ふて正か乞食に成ん被成らうとは思は無つたわし……政五郎さん何うか心を直をして國へお歸んなさい乞食は三日すれば忘れられ無いと言ひますが爰は街道筋の大道まや有るし懸意の者が通り掛り又辱かまひ思ひを仕被成さい者でも無い國へ歸つて幾分か小分衆も有ん被成事だから何か

二百八十四

に取ら若け然う者じや御座いませんか然し私も今度大坂へ久々で往け  
 ばお前さんを捨てたお玉は今大坂で大家の番頭さんの世話に成つて幾ら  
 か樂をえて居ると云ふ事を聞きままたから……何と夫は大坂へ往けば故  
 郷だに依つて重箱の隅を楊枝で堀る様にまで彼の女探出出して住所知れ  
 りやあ其場を去らす一刀の元に打つた斬つて仕舞ふから安心まで御出被  
 來い 政何うも喜八さんお前さんに目目懸つては面目次第いも御座い  
 ません誠又早身から出た錆びとは言ひ乍ら私も斯んきに成つて仕舞ひま  
 したお言葉に従ひまして私も是から宮へ歸つて一文商ひでもまで何うか  
 眞人間に成りますまお前さん是から大坂へお出被來て若しやお玉にお合  
 ひ被來てお前さんが奴を切つて仕舞をど何う被來らうと夫は御勝手次第  
 だが其時には此政五郎が斯んきに成つて居たと云ふ九牛一毛の怨丈の所  
 はお前さんから一言お聞かせ被來て下さい實に悪い奴で御座います彼よ  
 は詰り私も虚まされて仕舞ひましたが實に悔しう御座います……

イヤ夫は大きに御尤もだ今も言ふた通りお前さんの怨丈の事は必言ひ聞  
 かして遣りますから……是れは甚だ失禮だが是を持つて宮へお歸ん被成  
 ど三兩の金子を政五郎へ遣る押頂いて涙を流し難有存ぞます昔しの千兩  
 より貴ふ御座います何うか私も幸棒を致して宮で何う成り斯う成り知れ  
 る様に致して置きますから宮へ御歸り掛の節は何うか御尋ね下さいまし  
 喜然うさまお悪い事は言ひ無いら幸棒被成何れ歸へりに御尋ねずそめ  
 らと爰で桑名屋に別れて夜を日に掛けて舞州西成の郡大坂長町五丁目の  
 八百屋の久右衛門へ無事で居るか何うだかお尋ねし乍ら尋ねて来て  
 見ると斯は如何に以前は其屋に住つて居た者が今は表店を張つて立派な  
 青物店で店も中々盛大にして居るから喜八は大いに喜こんで中へ通入ら  
 うとするを爺さん腰を曲げて商ひして居る様子だから後るから 喜伯父  
 と伯父と……喜八で御座います 久エー是は誰かと思つたら喜八と  
 お能く尋ねて來さしつた見ると装も宜ひから伯父も安心まで 久婆々や

喜八が江戸から来たよと言ふので婆さんも其所へ飛び出まて来る喜八は喜まわゆ挨拶は後に仕ますから上りますと上つて是々ど是れから草鞋を解き杯を致して居ると見慣れ無い若ひ男に若ひ女が其所へ来て洗足何んがを取つて世話えて居ります是から足袋束を取り除けて先づ久々の挨拶が済み喜伯父と其後は伊無沙汰して済みません一寸文通でも仕無ければ成らんのですけれども伊手紙を差出しません様お譯……何日も乍ら伊橋鎌宜うまわ伯父さん欣んで伊呉んささい私も今では江戸淺草福井町二丁目に大坂屋と云つて日雇を致主人の十人や十五人は使つて居られる様に成りまえたからまわ久々の事だから何うもまわ故郷は見物えて置きたいと思つて出て来た様お譯で久夫は何うも何より結構の事だ私は何う仕たかと思つて何んか心配を仕たか知れぬのだ……婆さん……就ては喜八早速お前に近づきにするが……是梓や娘是は其私の梓に娘めでまわ斯う云ふ様よしたがいや何うも堅い〜夫にさ二人がまわ何んども

家を能く働いて呉れるので夫故表へ出て何やら斯うやら斯ん家でも借りて爰でまわやつて入られる様に成つたのだから何かまわ安心して呉れ然うして若ひ夫婦の者にも近かつきに成つて呉れる様よ喜へい……是れはお初にお目に掛ります私には久右衛門の甥の喜八と云ふ者で今伯父から聞きましたが大層骨を折て下さる然うだが何うか若ひ先きの無ひ夫婦の事だ又依つて何分伊頼み申しませ 養伊丁率の伊挨拶恐れ入りました私には不思議の縁で伊當家に参り只今では久三郎と申して居ります是は春と申す手前の家内で伊座います又以後お心安願ひますと挨拶も済み是れから喜八は手土産と言つて伯父さんに五両の金を遣る久右衛門も大層欣んでお辭儀爲まに夫を貰ふ扱一日か二日三日と厄介に爲つて居て有一日喜八は喜伯父と伯何んだい喜忘れも仕さい十二年の後と平野屋の宅へ捨てた子供は何う仕ましたらうさあ伯あゝ夫れもさあ……話うう〜と思つて居たが何やかや取込れて話ささかつたがイヤ彼の梓は仕合で平

野屋さんよは男の子が一人わん被来る夫れも男の子だが捨られた彼より  
平野屋さんの方が四ッ五ッ上で両方同じ様に育だて下まつて手前の捨て  
た仲も平野屋の息子も鳥渡其所へ出るにも小僧の一人も就いて装りも同  
志に頭のさきから履物迄お同様者履かして然して手習に遣つて下  
まつたりお稽古を仕込んで下さるいや何うも實に手前の仲だが仕合せ者  
だ時々店おぞを通ると遊んで居被成からは喜入の子だと思つても口を  
閉く事も出来ず何より仕合せ子供だと思つて前を通る度には氣を附けて  
見る様にまて居るがお前も夫れと無く見て来るが宜ひ 喜有難ふ座  
ます夫れを聞いて私は安心しました先づ〜壯健でさいすれば宜いので  
す一日會つて見て來まよと有る一日ふらりと出まして是から平野屋の  
前へ掛つて來る喜入もモ一十二年の昔では有るが知つて居る者が有ると  
往けおいからと手拭を以顔を包んでそうつと見れば知れ無い様にして目  
斗り出きて前を通り掛つて覗いて見ると帳場に番頭顔をして座つて居る

喜ア一彼は己が居る時分には己より一枚下の若い者だつたが由郎と言つ  
て居たが今では由兵衛とか由衛門とか言つて彼やつて威張つて居るが己も  
今時分迄辛棒して居たら爰の家のお羽の聞いた番頭位ひには成つて居ら  
れるだらうと子供が見たいから行つ戻りつゝ二三度致して居りますと奥  
からバタ〜十五六に成ります立派な息子が馳けて参りますと同じ装で  
十一二のが馳けて参る是は後から來て店で何か狂ひ廻つて居るのを番頭  
の由兵衛か 由衛店でお騒ぎ被成ては往けません奥へ入らつしやい奥へ  
入らつまやいと云ふのを喜入は見て 喜彼の小さいのは己の仲よ迷ひ無い  
平野屋の内に捨てられた斗りで彼んか大また装をして入る親は無く共子  
は育つ實に仕合せ者だぞ仲の顔見て欣んで居る内に小言言はれて仕舞た  
から子供は奥へ遣入つて仕舞ふ 喜まわ一目無事で居る所を見て遊げば  
宜いと大に欣んで是れから引返して長町五丁目に歸らうと平野屋の横町  
の新道を通り掛る一軒船板堀に見越の松橋子造りの意氣家二階の障子



を張替た斗りを見へて極く新しい其障子の内で三味線を弾いて居るのは  
程鳴手で音緒善く上方歌のあれ鼠を弾て居る喜八は元より好きさ道だか  
ら立ち止つて船板塀の所で耳を立てて聞いて居ると喜ア一盲く三味線  
を弾くかと考へて居る頼がらりと障子を開けて様側へ出た一人の女が一  
寸欄干へ手を掛けてパツと睡氣をするのを下からふいと見上ると是れお  
ん十二年前に宮で別れた女房お玉ハツと驚く吐壁にお玉は氣が注か無い  
と見へて座敷へ這入つて仕舞う喜八は喜ア一爰に居やがるさあ悪い事  
は出来ない者だ天頭様の引合せ宜志是れは何うまでも放擲して置く所  
無いア一棒の顔を見様と思つて頬被りして居たのは僥倖の幸ひ己の面を  
見れば忘れや仕舞ひが斯うして居れば知る氣支ひ無い顔の知れぬは幸ひ  
と是れ成りけり直と歸つて来て夕飯を食つて喜伯父さん私は其所等を  
素見して來ますせ伯然うかい素見かい……素見に行のは宜いか脇差何  
んぞを差して行き被成んかよ大坂と云ふ所は貨に何うも人氣の悪い所

だから間違ひでもして人々創でも付けては成らんから喜大丈夫でげす  
喧嘩杯をする氣遣ひは座いません腰に差し附けた者が無いと寂まくて仕  
様が有ませんと脇差を打込んで夜に入つてふらりと長町三丁目を出て  
是から未だ宵の口で浮座いますからブラ〜那方此方を素見々々尤も大  
坂は修案内の通り遊び所が大以所有ますから素見々々素見いて夜の丁度  
九ツ少々廻る頃迄ひも一時間は宜志と思ひますから兼ねて日の内目を付  
て置いたるれ玉の家表口へ往つて漸々に喜入水口を開けて這入り込んで  
同所の座敷も居るか分りませんよ依つて密と入口の座敷に來て見ますと  
行燈の光り暗く成つて居ります突然行燈の蓋開けて燈心をかき立てて見  
ると五十二三の婆さん寐て夫に十二三の小女寐て居る喜ハ、爰迄や無  
いはと奥へ這入つて見ると誰も居りませんもう外に座敷も無い様子と右  
手の唐紙ガラリと開けると櫓子が掛つて居りますから扱は二階に寐て居  
るのだらうと二階も上つて行く二階は二間に成つて居りますして口元の座

敷の方を開て次の間又行升と正面の床の間の方を頼まにして朱塗の丹形  
方の行燈が有りまして暗く成つて居ります其所に床を敷ひて良ひ心持  
に寐て居る様子グーッと進んで見ると枕が二つ有りますが今夜は旦那が  
来無いと見へて床の真中に一人りで寐て居る黄八丈の夜具蒲團で相が物  
に纏まつて宜し心持ちに寐て居る様子寐顔を見ると間遠方無き玉で  
伊座います願て行燈の光りを揺立てし明るくして置て枕元の煙草盆に朱  
羅字の煙管を左まて有るから其奴を取つて一服詰めて行燈の上から煙管  
を突込んで光りで煙草を一服着けてパクリ〜と煙らまてポント灰吹へ  
敵と音がするから吹出えて又一服呑んで煙管を側らへ投り出して腰に  
またる刀の鞘を拂つて鋒首先きで上に掛つて居る小夜着をポント撥る下  
は綺甲妻の振巻が掛つて居る襟が黒天鵝絨が着いて中々立派な者其奴も  
鋒首先きで突かれてボンと撥られる二つの物を撥られて半身出まて未宜  
い心持ちに寝て居るのは寐入鼻と見へる是れでも起きないかと脇差の平

で横面をヒョリと打撃ヒヤリと爲たからヒョイと目落して見ると眞先さ  
の所に大の男が刀を持つて直立て居るからガタ〜震へる喜八は行燈を  
グーリと此方へ廻して明るく爲え喜ア手前乃公の面知つて居やうが  
能く見ると眞先へ長ひ者を出して置いてニユツと明りの所へ顔を出すの  
を女はブル〜震へ乍ら顔を見ると己が十二年前亭主にまて子造爲えた  
中で有まそから忘れべき筈は有ません 女オヤまあお前は誰かと思つた  
ら喜八さん何うか勘忍まてお呉れ 喜八益敷いやい籠袴奴腹の立つ事有  
るか無いか手前も覺へて居るだらう忘れも爲ねへ十二年跡手前の爲も店  
を失策り途々六坂に居られ無く成り宮の宿送往つて艱難爲え掛句の端で  
に厚木の塚で死にはぐれに迄合つて居るけれども夫りや兄弟分と二人で  
手前の亭主の政五郎から夫丈の金取つたから何よも正か今更手前杯を濁  
て愚言を言ふじや無けれども乃公が今度此方へ来やうと思つて宮の宿送  
来て桑名屋の家へ泊つて昔々語りでも仕様と思つて往つて見れば桑名屋

は代が變つて福島屋手前は政五郎郎が煩らつて居るのを替てやがつて宮宿の博奕打仁藏と云ふ者を足にまて此大坂へ逃げて来て又も其仁藏を捨て今じや大家の番頭の圓ひ者も成つて樂をまて居るとの事誰も知る前と思つて居やうが天知る地知る何う爲たつて知れずには居ねへ今度此方へ來る時に政五郎殿に四日市の松並木で遇つたら氣の毒千萬の事乞食に成つて居被成手前の事を何の位に怨むで居たか知れねへ然も乃公が大坂へ行くと云ふのを聞いて若し大坂でお玉に遇つたら何うか怨み丈は聞かして遣つて下さいと乃公は依頼されて來たのだ昔まは平野屋の失策者今じや八百万石城下で人に知られた悪黨鬼坊主の清吉が兄弟分大坂無宿喜入と言つて少まは人に知られて來た廣い世界に身體一つ何んも恐ひ物有りやアしねへ氣の毒だが手前の生命今夜貰んだから何う謝罪たつて勘忍の仕様は無いから念佛の一つも唱ひて十分に覺悟して立派に往生する玉喜八さん何うぞ然う言すも助けてお呉んなさい 喜右流せへやと刀劍

を持ち直をす 玉アレー人殺まど聲を揚げ様とする奴をすばりと肩先から乳の當りまで五六寸切り下げたアツと言ひて逃げ掛る奴を突然胸の當りを蹴つけたから後へ倒れる奴を馬乗に成つて腹先へズブと墨迄突き抜いて莞爾々々と笑ひ乍ら 喜ア一宜ひ心持ちだど刀劍の血を拭ふ喜入は體を引く吐嗟に後ろでヘエンと言ふ咳拂ひがする叱驚まて喜入返つて見ると長物を一本差した奴が尻を羽所つて腕を組み後背に直立つて居るから叱驚まて死骸を飛び越へ脇差しを青眼に付けて 喜ヤアなんだ此野郎驚かしやがつて彼の男は 「ハアハハハハ」と笑う 喜ヤア喜八さん其ん赤に驚くや及赤いは名前は聞いて居たけれども目には掛るのは始めて、私は兩國無宿の鑄掛松と云ふて鬼坊主の兄弟分 喜お前の言葉に清吉の兄弟分と言ひ被成たに依つて一寸爰で近付と被つた手拭を取る喜入も爰で安心をまて始めて脇差を箱に治め 喜ヤア爰へも側へ進みよりは是れら鑄掛松と喜八のお物語りも移ります一寸一服……

喜八は松五郎に向つて 喜何う爲てお前は此處へと云ふから 松實は聞及びだらうが清吉が佐渡へ来て互ひに相談の上で七月十三日の夜佐渡を破つて漸くに爲て海を渡り越後の寺泊りへ着き鮫蛇傳左衛門と云ふ家にて厄介に成て居たが何うも私も少し長居を爲ては居らん事が出来たに由て清吉と一緒に立うと思つたが清吉は未だ身體が好く無いと云ふから先へ一人で大坂へ来たがモ一来るか〜と毎日待て居るが今日が日迄逢ねへ喜八さんの前だが二日前角の芝居を見物も往てチラリと此女を見てア、美しい女だア、云ふ女と四五日でも寐て見てへと思ひ込ひ段々様子を探つて居れば鴻池善右衛門の番頭芳右衛門の園い物と云ふ事を聞たに由て家まで探りを注げて居る且那の來ねへ晩に一番抜劔で脅かし付けて思ひを遂げやうと實は今夜小荷は忍んで來て水口から運入つて見ると思ひ掛り無く跡からがらりと明たに由て陰々潜んで聞けば今の仕末小荷の丁は

とやア實はお前が女を脅して居るからお前を切て女を助け候應云はせつウと云ふやうとお前を實は切うと思つて居る内に今お前の物詰の内に鬼坊主清吉が兄弟分大坂無宿の喜八と云つちやア少しは人とも知られたと云はれて見りやア乃公の兄弟の兄弟分だと思ふからエ、仕方が無へ女は思ひ切れと後に立て見て居たが清吉の名前が出あけりやアお前の命は無へ處だ喜八が喜サ、累卵へことだ 松五郎此處に永居も出来ねへから小荷と一緒に來ねへ 喜何處に居るの 松乃公ア此三度倉に居る者だ 喜夫れじやア一緒に往うと出やうと爲た時に松が 松ヲイ喜八さんお前も何うも仕事の分は暗へじやア無へか幾らか有るだらう有る物は持て行ねへのは虚だ松五郎喜八二人で取返して諸方を尋ねて金子百三十兩あつたのを掠取て往つたのは中々又抜目の無い奴でございませう切て兩人で三度倉へ行く松五郎の云ふには 松叔父はの方は江戸へ歸る積りで暇乞を爲て當季此方に遊んで居ねへか 喜まやア然ふ爲やうと長町

五丁目に歸つて叔父の久右衛門へは江戸へ出立を爲る体に爲て叔父の家を出て是から三度倉に居て鐵掛屋松大坂の喜入歌樂榮隆榮華は勝手次第金子が無くあれば大坂は物持の多い處でございませうから仕事を爲い面白可笑く遊んで居りまする却既お話しは變りませう鬼坊主清吉は八月十五日越後の寺泊りに於て源左衛門妻のお榮の首を切て其首を提げて八雲山地藏尊祭禮の場へ隠込んで参りませう思ある處の蜘蛛親爺の源左衛門を始め土雲崎の藤五郎荒磯の大藏松山の兵七等を切て遂に越後退散爲て大坂へ出て参りませうしたけれども大坂に松五郎が何處に居ります事やら分りません事故暫くの間逗留爲て尋ねて居りましたけれども更に知れません事故次第に由たら松は大坂には居あいのだと思つて九州を一つ廻つて見やうと云ふので大坂安治川から乗船を爲て豊前の國小倉へ押渡りましてあれから豊後筑前筑後肥前肥後と参りまして肥後の國掘田郡熊本の下梅屋六左衛門とす方へ一泊致ませませた何うも兩三日以前

から腫の心が痛いと思つたが所謂底豆と云ふ奴が出るので尽く足が痛みます 漬此りやア逆も出立は出来あひと思ひますから一日二日と逗留爲て居る内又段々腰が強くて成て來ました吹切らあひ内は立あひと思ふから五六日逗留爲て居る内に好い鹽梅に吹切て追々全快又趣くモ一此鹽梅では近日に立てるだらうと思つて居ると或晩の事でございまして隣座敷がガヤ／＼賑でございませう其内に酒が廻つたと見へて三味線杯を掻て男が大きな聲で唄つて居る清吉は毎晩隣座敷で一人で仕様が無いから女中を相手に酒を飲むとか按摩でも招んで療治でも爲て貰つて居る處へ久々で三味線の音を聞たんだから心面白く 漬何んか客かど襖の間から覗いて見ると三十四五に成ります頗る年増が一人下女体の女が一人夫れに頭が少し冗て居ります五十二三の男が一人と物持でも爲て來たかと思ふやうお若い男が一人男女四人連れでございましてお内儀さんお内儀さんど年増の事を云ふ傳兵衛とん／＼と云ふのは番頭さんらしい人傳兵衛

類りに大きき聲を爲て唄つたり踊つたり爲て機嫌を取て居る様子で賑か  
き酒宴で有りませす。漬扱ては何處のお内儀さんか堅氣では無へやうだ  
然し好い女だと思ひ乍ら清吉は枕に就て寐て仕舞う其内に隣座敷も寂  
と爲て寐て仕舞つた様子扱て翌朝に成り清吉は遅う座敷いませから揚子  
を使ひ乍ら廊下へ出て隣座敷を見ると皆一同漬飯を喰て居る旅泊屋の下  
女が廊下の方へ汚尻を向けて給仕を爲て居る通り乍ら向ふも顔を見ると  
浮世の義理で漬早うございませすと隣座敷へ挨拶を爲る向ふも漬飯を  
喰べながら挨拶を爲る清吉裏櫓子を下りて顔を洗つて座敷へ参り梅干に  
三盆の砂糖の掛つたのにお茶が出て居る清吉は茶を飲んで居る内に隣座  
敷がガヤ／＼爲て来た何んだか金が紛失したと云ふ聲が聞へる處へ下  
女が漬飯を持って来たから漬何う爲たんだい。下女ナニ貴殿昨晚悪い者  
でも泊つて居つたど見へましてれ降りのお内儀さんの汚尻巻が見へなく  
成て何う尋ねても知れません勿論早立の汚客様が大分汚座いませたから

モ盗んだ人は立て仕舞ひましたらう宿でも大變心配を爲て居ります。漬  
夫は汚氣の毒を譯……………と云つて居ると隣座敷で男の聲を爲て傳お内儀  
さん今下へ参つて汚主人に廻りました處が中々此家の主人頑固でござい  
まして汚預物で金子を汚買すことは出来ないと云ふんです。が金子が無  
ければ國へ歸ることが出来ないので何う爲たもんでせうか。女の聲  
で女、好いやね夫々やア此方よ妾は逗留して居るから吉蔵でも一人國へ  
返えて金子を取寄せやうとやア無いか。傳ければ是から國へ歸つて亦  
来る迄此家に斯ふ遣つて喰て遊んでるのも詰らない。女、夫りや詮方が無  
いやね……………吉蔵國へ往てお金子を取て来さう。吉、……………とや念いで往  
て参りませうと云ふのを清吉降りて聞て居たがスツと座を立て。漬、汚免  
被爲まし。女、此りやア何うもれ入益敷うございませう。漬、何う致せませ  
て唯今降りて聞て居りましたが何か昨晚……………エー金子を汚取られ被爲た  
やうに承知致しましたが飛んだ事です。アは話まの汚様子では國へ是か

ら若衆も取りよは遣はま被爲るやうに伺ひましたが二十兩か三十兩に  
あん被爲ば好いのでせうから失禮乍ら借用立て下さうと思つて此方へ出  
て参りましたが……ア貴方方は何方で借座います 傳私共は長崎で  
ざいます 清長崎から幸ひの事です私も是から長崎へ参るんですから  
りました時に頂戴致しませう借座用位いから私が借用立し升 傳然  
被爲て被下れば是も越た事は借座いせんが……ねへ内儀さん然ふ云  
ふ事に被爲たら…… 内然ふだへ……けれども見ず知らずのおかたに然  
ん事事を願つては 清ナニ然ん事事は構やア爲ません失禮乍ら何の位  
い 傳是れからズーと長崎へ直ぐ歸るんでござい升から如何程も要ら  
いで借座いまして二十兩も借借やて…… 清左様でござい升か二十  
兩や三十兩から何卒遊んでる金子も借座いますから……物を借買ん被爲  
たり爲ては二束三文でございます借心配被爲ませんやうに……と居間へ  
往て自分の胴巻を持って来て 清じやア五十金借用立し升から 女然ん

きに拜借致さくつても宜しう借座い升 清イヤ然ふでございせん一  
ア餘分に持て出で被爲れば借安心ですから何れ私長崎へ乗込めば  
さに出ます 女恐れ入ります 傳ねへ内儀さん拜借被爲て置ささい  
女然ふかい夫じやア傳兵衛せん証文を…… 傳勿論の事です 清ナニ  
宜うございます証文杯は 傳好い處では借座いせん何爲る此りやア恩  
金でござい升からと云ふんで金五十兩正又借用しし長崎へは乗込の節  
は借返金やすと云ふ文言に認め 傳旦那様は失禮乍ら借姓名は 清江戸  
の物で小間物屋清兵衛と申しませ其處で小間物屋清兵衛様と認め恩金で  
すから殿とは書ん自分の方の町名番地名前を書てお内儀に爪印を押させ  
傳是で宜しう借座いませうかど出そ 清如斯は町噂事には及びません  
のにと証文を取上げて見ると長崎丸山寄合町神崎屋後家美代と云ふ名前  
其處で清吉が 清ア、丸山の寄合町じやア何うも照氣玄やア無へと思つ  
たが女郎屋のお内儀だお後家とまである後家の二字が有難へと斯ふ思ふ

から 齋就てはモ、番頭さん今日是从から立立さるんでせうが出てから  
亦降て来ると不可せんから今日一日伊逗留爲て明朝天氣を見定めてれ  
立ささい一蓋私が貴郎方へ献じます私も長い旅で江戸を立てから九州路  
へ這入る迄三味線と云ふものを遂に聞た事が無い然るも昨晚此方の伊座  
敷が伊陽氣で實に羨しく思つて居つたんですから今晚此處で日の内から  
大陽氣に一ツ騒いで戴きたいんですがモ一日伊逗留被爲ちやア何うで  
伊座いませう傳兵衛酒と聞た日にやア腰が立さい 傳お内儀さん降り升  
せ出りやア陰度降りますせ降れば泊らあさやア成らないんですからモ一  
日伊逗留は何うでげせん……鳥渡れ殺せん今日は降るね下女も調子を  
合して 松降り升よお内儀さんモ一日御逗留が好う伊座い升よ然うあ  
さい其處でお美代も 美さやア然ふ爲ませうと意を運留と極る正午少し  
過から清吉は二階を下りて下へ酒肴の用意を吩咐け 遺物定は一切私の  
方で爲るんだからと是から四人の者も伊馳走を爲る夜に入る迄チャカ〜

騒ぎ傳兵衛と云ふ番頭が年にも耻ぢつ女郎屋の番頭で藝があり升から廻  
々幾多の藝を見せる久し振で清吉も思ひ掛け無く愉快を感しました傳兵  
衛はモ一ペロ〜と酔つて仕舞つて肴の中へ轉つて仕舞う急や座敷が引  
けると云ふ時に 美お松や和女は誠に寐相が悪くつて不可さい昨夜も妾  
のお腹へ足を載せて然ふ爲て和女ア女に似合さい耐きを極て不可さい  
ヨ 松誠に何うも済みません 美ア一寸……姉さん誠に済みませんが  
夜るの物を敷て此旦那を伊寐かま申し其傍の處へ妾の蒲團を敷て下さい  
此者が寐相が悪くつて仕舞が無いからと云ふのを聞て清吉心中に 遺イ  
ヤ懸着すつたど悦んで其處で床を離して一ツ座敷へ寐ましたが是れば何  
うでも密接る奴で測らずも月下氷人が悪戯か爰に神崎家の後家と赤繩を  
結び 美夫では長崎へ来たたら陰度来て下さい 遺サ、足さへ平癒れば必  
ず乗込むからと約束を爲たのは皆さ知つた事では無い段海斗りて扱ては  
翌朝に成りまして四人の者は爰に梅屋六右衛門の家を出立を爲る清吉か



是から七八日遅れまきてモ一足も平癒つたに由て合計を済ませて梅屋を出で日に歩み夜に泊り道中お話しも無く乗込んで参りましたる長崎丸山の寄合町神崎屋と云ふのを尋ねて来ると中々立派な遊女屋戸口には柿色の暖簾に子持小判形の中に白く神崎屋と染脱て有ります 清ハ、ア此家だなど思ふ處が清吉が梅屋で逢ひましたる處の番頭の傳兵衛が家から出て来たから 清モ、傳兵衛とんかい 傳ハ、ヤ旦那入つしやいモ一毎日貴郎の噂を聞き……サア何卒此方へ……コソ早くは洗足を取て進るやうに直に飛込んでお美代へ此趣きを話すとお美代は最早来るか来るかと夢よ迄見て居る處ですから奥から飛出だして来て顔を見合せ互ひに莞爾笑つたは何んかもので多座いませうか是から奥座敷へ通りませす其處で先づ過日の挨拶も済んで仕舞ひまきて何は無くともと云んで是から料理の趣向が出来る固より蕩樂者の事でごさいますから 清何卒賑かよ一ッ騒ぎとふ多座い升るに由て多座に蕩樂者衆があるからと女郎こそ寄せさいが甚

者を招んで家中へ女郎屋の事だから戀花を打て夜に入る迄神崎屋の家が轉覆るやうな大遊びを爲てダ、ラ大尺で金子を使つて遊びましたが扱て其晩一泊を致えてお美代は真夜中に至りまして好い工合に寐静つた時分を窺ひ清吉の座敷へ忍び込んで合衆を致しました是から清吉は神崎屋にズル〜ベツタリで居ります内に最早當時では亭主氣取りの有様であるが奉公人や何かへ尽く清吉が爲る事を爲て遣り升から奉公人も此情をを知つては居り升が一同ア、云ふ方から當家の旦那に爲ても奉公人が却て仕合せであるからと云つて誰一人清吉の事を悪く云ふ者はございません是は何爲る蕩樂者の上りの清吉だから人に悪く云はれるやうな事は爲て置き升まい然る處親類の方へ是が知れましたに由て親類が来てお美代に向つて 親何處の者だが知れも爲さい者を家へ入れて嫁んで居させると云ふ事を門たが宜くさい直ちに然ふ云ふ人は追拂つて仕舞つた方が宜からう万一夫が出来さいと云ふ事から親類は音信不通だに由て然ふ思

つて下さるやうに 美夫やア貴郎方の方で交際被爲らんと云へば夫迄の事今の若さに到底一人では居られませんかから自分の目に叶つた者をば家へ置くには貴郎方の指揮は要らぬ事一人で妾は遣つて居りましたが今迄貴郎方に涉厄介に成た事はございませぬ交際を爲さければ交際を被爲んで宜まうございますとんと御付けたる時よ伊親類の者もハツと驚いて呆れて歸つて仕舞ひましたか美代は中々男勝りの女でございませぬから爰で清吉を神崎屋四郎兵衛と云ふ名前を披露を爲て二代目四郎兵衛と成りました是からは清吉遊女屋の伊亭主間さへ有りませぬれば遊びに出ては花でも爲て遊んで居やうと云ふ三度々々お酒を飲んで旨い物を喰て伊置包みで居られるんだから如斯旨い事はございませぬ是で報ひが来なければ誰でも悪い事は致しませぬが扱て不義の富貴は浮ゆる雲の如くと云つて悪く成て来た日にやア堪るものでございませぬ遂には今迄繁盛爲て居た神崎屋がね職女郎が客と情死を爲る二枚目の客取り女郎が逃

亡爲て仕舞う三枚目の是れがと云ふ女郎が瘡毒で鼻が落る洗石の鬼坊主清吉事二代目の神崎屋四郎兵衛も之れには弱つて 道何卒好い工風は有るまいかとお美代に相談を掛けると 美夫れでは詮方が無い今に和蘭陀の船が這入つたらば直買を爲つて一ツ金儲けを被爲たら何うでございせうと相談を掛ける是れは其直買は昔馬鹿に入釜敷いので發見らるれば刑に成る陣屋は梅ヶ崎と云ふ處に建て有りまして此處は鍋島と黒田が半年交代で預つて居る夫に長崎奉行が設て居りまして和蘭陀の船が這入り來ると夫をソノ内々で直接に買ひまする奴直買と云つて伊法度で伊座います和蘭陀人の方でも徳川様に賣渡すと思ふやうに金子に成りませぬから内々で買ひ來る者に直接に賣た方が幾分か利得が有り升る事故大變夫が入釜敷う伊座いました當横濱杯をば左様事出来升まいけれども固素の事でござい升るよ由て折々是れを遣りましたけれども知れれば長崎で磔刑に成ると云ふ其處で清吉家を書入に爲て二百三十兩調達さしド

ン、雨の降る日に笠を以て顔を隠し、ノを着て船夫を一人拵へて網船  
と云ふ跡、拵へ和蘭陀船に直買に出掛けやうと云ふ處を運の尽か梅ヶ崎  
の陣家で捕縛に成り愈々江戸表に差立に成る次に……

第二十一席

エ、茲に其時の梅ヶ崎の陣家は鍋島の持ちで船を出した處をば認められ  
遂に一旦梅ヶ崎に曳かれて調べに成り升と當人は魚を捕りに来たのだと  
やま升が段々調べて見ると三百兩の大金が有る魚を捕りに来るのに三百  
は要らぬからうと云ふ處から段々調べよ成り升と最早四郎兵衛も隠すこ  
と出来ず、清モ一天命何うも詮方が無い白状を爲て仕舞ふと観念まで  
清實は私は鬼坊主清吉と云ふ佐渡を切抜けて参つたる重罪人でござい升  
るに由て江戸表に差送りを願度ひと悪悪丈けを白状致しましたるから上  
役人も大きに驚いて直ぐに長崎奉行の手に引渡しよ相成る爰で長崎奉  
行の方で亦もお調べに成りましたが直買の儀は一切上げません唯前年

の悪事を残らず上げたるに由り差立御籠で送りにある之が世の中へハ  
ツと噂にあり大坂に居る喜八松五郎の耳にも今度鬼坊主清吉と云ふ者  
が長崎で召捕りに成て鶴鷄で江戸へ送りに成ると云ふ事を聞たから、  
兄哥は大坂へ来て乃公と逢ねへものだから長崎の方へ往て召捕りに成た  
と見へる鶴鷄で江戸へ送ると云ふんから東海道へ出張て喜八鶴鷄を被  
つてモ一過兄哥を娑婆の風も當てやうとやア無へか、喜宜からうと云  
ふので十二分の仕度を爲て兩人は東海道大津へ出張て待て居ります處へ  
長崎奉行の手で差立御籠の周圍は嚴重でございませ、深川無宿清吉と云ふ  
木札を立たる鶴鷄が通る之を跡から松五郎喜八の兩人が尾て参ります中  
々に嚴重でございませ、手が出せません東海道も段々に江戸近く成て  
参ります今夜は今夜と思ひます、何うも言く参りません宇都の谷の跡  
を越て鞠子の宿へ泊りましたが何うも言く行ない鞠子を通つて之から阿  
部川の宿から駿府の掛城下と来る之を段々と跡を尾けて参りますと江

尻が中食で汚座い升る松五郎喜八の兩人は城下から後へ一里半來ると小  
安田と云ふ處があつて此處は桶館が名物でございます其館屋へ二人で這  
入つて参りまゑて亭入つしやいませ 松爺さん館を汚呉れ 亭ハイ小  
さな桶へ這入つて居る館を持て参る二人は茶を飲みながら館を喰つて居り  
ますと江戸方の方から駿府の方へ向て來る旅人おさんどの單の半合羽纏  
拵への道中差替の三度笠を被り足袋束を掛けて群内手甲を掛けドンク  
急いで通り掛つたが笠の内から桶館屋の内をワロリと見て行く 亭汚客ん  
被爲て被入しやい汚休み被爲て被入しやいませスーと行過ぎたが被つて  
居た笠を取てスハリと館屋の内へ這入つて來る 亭入つまやいまして掛  
けあさいませ彼の客はツカ〜と松五郎の傍へ來て 男ヤ〜誰かと思つ  
たら松兄イ芝や汚座いませんか 松ナ、吉かい……此人は深川黒江町經  
師屋の一子で元盛り場稼ぎを爲て居たる祐天小僧の吉之助傳馬町の汚半  
内で鑄掛屋松が小僧に爲て置た……小僧と云ふのは元松五郎が名主様を

爲て居る時男色を爲た奴 吉兄イ不思議の處で汚目に掛りまゑた何處へ  
お出さざる 松ナニ乃公は大坂から此方へ來たんだ……お爺さん奥の座  
敷が明て居るなら借ても好いかい 亭へニ宜しうござい升とも奥へ入ま  
つて汚悠然は休み遊ばせ 松奥へ行くと此れから三人奥へ行て草鞋を解  
き上に昇つて三人共先づ足を休める 松ニ、吉や此人は乃公が兄弟分大  
坂の喜八てへもんだ……此人は喜八乃公が元半で奴に使つて居た祐天小  
僧の吉之助と云ふもんだ就ては何處に居る 吉私は駿河の府中に今居り  
まして家にマア若へ奴の五六人も置き升から夫れでマア何うやら遊んで  
居りますと云ふのは所謂盛り場稼ぎ今も金着切の五六人も置て在つて居  
るな奴ではございません 吉大坂から何處へ行く積りで 松ナニ大坂  
の方から鶴鷄が今往たらう 吉へエ今通りましたが深川無宿の清吉と書  
て有りました掛違つてお目には掛りませんが名は覚えて承つて居ります  
松乃公は實は吉の前だけれども那の清吉の兄弟分さんだ 吉成程 松其

處でモ一逼兄哥を鴨鷄を破つて助けやうと思つて爰に居る喜八は清吉の弟分だから大津から付て来たが殿重で破れねへ何卒箱根の山を越ねへ内にモノに爲やうと思つて居るんだが中々殿重で手が出せねへ直宜うムいませ小が破つて進ませう 然好いかい吉 「破れねへことがあるもんですか小が兄哥は傳馬町で伊恩に成て居り升から和郎さんに伊恩返しに爲るんだナニ朝飯前の仕事でございます大變お野郎が来れば来るもんで之から鰯を喰つて此勘定を済して駿河へ歸ると云つた祐天の吉之助が引返去まえて松五郎喜八と共に三人連れ江尻の宿へ這入つて来る鴨鷄は沖津から沖津川を渡つて薩陀峠を越すと下が倉坂の宿藤屋清右衛門の家へ鴨鷄が泊りに成て仕舞つたコレ幸ひと三人の者は道を急がないで薩陀峠へ掛つて来る今では伊案内も有りませうが薩陀峠は下を通りませすが昔は上を通りませたもので其時分に下を通るのは漁師斗りでありました三人は下を通つて倉澤から直ぐに海ッ先へ降りて浪打原へ来て吉

之助が先へ立て 吉何爲る此處も伊出でございませし 撫何う云ふ事に爲るんだ 吉此宿へ鴨鷄が着て居るんですから清吉兄イを運出えて来てア逃げたからつて迎も兄哥の前だけれども逃げられません海と云つても猶行けづ之から跡へ引返して沖津川を渡つて地源寺を通り題目石の下を這入つて行くと獅子原之れから三里行くと万澤万澤から二里行くと南部南部から三里身延身延から三里切石切石から三里鰯澤鰯澤から四里府中府中から一里甲府です此道が迷るには好いんですが道が中々悪くつて逃切れませんから仕方がない此海を向ふへ突切ると向ふが伊豆でグス海上は九里しきやア座いません此九里を船で渡つて伊豆へ這入り熱海に伏爲て居る方が好うござい升熱海まで小が伊送りヤし升から 然汝へ大層道が委しいかア 吉エ、那地此方仕事を爲て歩いて居りませから大概心得て居ります手賃て伊吳んませいと三人海ッ端へ来ると船が一隻砂原よコロがつて放り出してありますからスル〜と海の中へ引張

出し二人共船の中へ入れて 直此處に待て出でさせへモー夜るだから  
誰も来る者はございませんと船を一本何處からか持て来て中へ入れ 直  
何んか遅く成ても此處に待て居てお呉んさせへ吉之助居さくまつて仕  
舞つた良暫く経過と恐ろまい大ききお鉢を引摺て来て 直兄イ〜  
取てお呉んさせへ 極何んだ之れは…… 直腹が減たらうと思つて飯を  
持て来た三木屋と云ふ家の勝手から這入つて移えた半りの奴を奪つて来  
た 極酷い事を爲やアがるかア驚くだらう 直夫りや驚かか今度傍の家  
へ往つて伊菜だつて居やアがつて旨煮に香物を持って参り 直お茶だけ献辨  
爲てお呉んさせへ此お茶は藤屋から盗て来たんだ夫じやア待てお呉んさ  
せいと出て往つた切り良暫くの間は歸つて来さい藤屋は海岸の方でござ  
い升から裏手に参り升と海の方が下つて居り升から床が高うございます  
祐天吉之助海ッ先の高塚を乗越えて庭口へ忍び込み逃口を明けて番かか  
ければ不可んと思うから三尺の切戸又錠が懸つて居るから手拭を零付け

てガチリと捻切つて切戸を明けて置いて邊りを見ると右手の處に罅隠がある  
床が高いから掃除口から忍び込んで中へ立てる罅隠しに頭が届きません  
吉此處から忍び込むより仕方が無いと夜の彼は九ツ具付い頭に大便口を  
明けて此處から忍び込まうと思ふと此方は虫が知らずか清吉は鴨鶏の中  
に居りましてキヤリ〜腹が痛んで来たに由て 直何卒大便を一ツ願ひ  
ます大便を願ひます目明まが困るじやア無へか今頃 直何卒願ひます  
目待てる〜一人起て是から役人の處へ往て 目上げますエ、囚人が  
大便を願ひますそうや錠を此處被爲て下さいまし役人は兼詰頭を爲て錠  
を渡す目明ま錠を取て鴨鶏の錠をピシッと明けて 目サア出る…… 直  
へエ、糞尻を取て是から曳出す新らまい生木のホタが飲つて居るから歩く  
事が出来さい夫れを引摺てガタンガタンと大便へ参り穴を跨いで大便を  
爲る目明しは臭いから外で糞尻を取て戸を足で押へて待て居る清吉は跨  
いて大便を爲てヒヨイと罅隠しの穴から下を覗いて見ますると罅口が明

て居ると見へて外はカン／＼爲る月夜でゲスから月が全で肥口から蓋て  
居ります吉之助は忍び込うと思つて立て居ると中でガタン／＼ホッを引  
摺て来る音が爲るから 吉ハテナ清吉兄イ大便よ来たかと思つて耳を引  
立て様子を窺うと 渣何卒汚柔かに願ひます 且早く仕ちまへ／＼ 渣  
未だ這入つた斗りです汚慈悲を願ひますと云ふ聲を聞て 吉扱ては我思  
ふ通り大便に來たホッ幸ひと思ふから肥口の口から忍ばうと爲る今迄  
四角く中へ月が差て居た奴が吉之助の陰でパツと暗く成たから清吉下を  
覗きあがら 渣ハテナ……………今迄差て居た月が急に暗く成る譯は無い……  
……がと見て居るとズーッと身体を入れた不潔いのも何も忘れて差て居た  
長脇差を鞘ぐるみ鞘を握た儘でズーッと手一杯延また奴が上に跨がつ  
て居る清吉の内股に柄が突當りまた大抵並の人間なら聲を立てるが大膽  
不敵の清吉 渣ハ、ア誰か尾て居るかと思ひながら手を伸えて見ると刀  
だから 渣ア、辱け無い……………と突然其刀を引奪り 渣エ、有難ふ浮座い

ますグツと雪隠の戸を明けた途炭又目明まは繩尻を握つて行くも後から  
清吉刀を抜て拳も通れと脊中から胸へ突抜た 且アツ……………と倒れる奴を  
突つ放しに爲て脇差を提げたありで突然庭の方の高塀の雨戸を一枚明け  
て見ると襦袢を爲た奴が庭の中央に突立て居るから一枚二枚と戸を繰  
て箱段のある庭をドン／＼と降る事は出来まいホッが絞つて居るか  
らガタン／＼と二段斗り下りると彼の男飛んで來て脊中へ背負ひ裏口が  
明て居るから其處からドン／＼ドン／＼遠方へ連れて來る 吉大きに兄  
弟待遠だつた 二人ソソ……………と云ふんで清吉を載せ祐天吉之助片裸股で  
腕一杯櫃を押切て船を出す 吉何爲る跡から追うやうな事は有るまいが  
腕を貸て呉れると一挺の艦を二人で押切てセツ／＼／＼方量一杯押  
切り夜の明る迄に九里を渡つて伊豆のハタへ着きまた夫れ迄に船の中  
でホタを叩き毀し繩は残らう切捨て仕舞ひ仕着は腕で捨てさせ祐天が下  
へ着て居る着物一枚に羽織一枚細袴から胴着から半合羽から笠足袋束よ

至る迄清吉に譲つて、道ナ是からは伊勝手に被爲小吉は着働一枚羽織一  
枚是で澤山で伊座い升、松夫れ芝や、汝氣の毒だ、と松五郎が心腹を爲る  
のを、吉兄イ是が伊恩返しで、グス小吉は裸体でも宜うございませす清兄イ  
は身拵を好く爲ねへと累卵へからと陸へ昇ると直、跡白浪と藤天吉之助  
は十國峠から東海道三島へ出て府中へ往つて仕舞う此方は三人熱海へ参  
りまえて今井半太夫方へ投宿を致まされたが何うも調べが嚴重でござい  
升るに由て伊豆にも居られませんかから迎も何うあるものかと久々で三人  
江戸表へ乗込んで参りましたのが天命の尽る處か遂に品川迄来ると何爲  
るモ一網を張たる如く嚴重に手が廻して有りませたる事故違々品川宿で  
捕まりました此伊調べは他の講談にも出て居りますから略致してナ上げ  
ますが扱て取押へられて曲淵甲斐守様の數回の伊調べを受け三人共に今  
迄の罪状を殘らず白白に及びませたから遂に小塚原に於て江戸中引廻し  
の上獄問と云ふことで江戸中の評判で伊座いますと爰に上州伊香保の温

泉に湯治を爲て居りました鏡師の伊之助が是を承はり、伊組伊今度念々  
三人が捕つて今迄の悪事を白狀して引廻しの上獄問と云ふことだが何う  
だいモ一乃公達も伊年貢の上時だらう刑に就ちら肩く兄弟分と一緒に就  
うじやア無へか、勝ア、一妻も豫て其覺悟夫れ芝やア一緒に自首爲やう  
と惡に強きは善にも強い此二人も江戸表へ出て甲斐守様伊役宅へ自訴に  
及ぶ爰で此者を調べ升と固より伊之助も相當に人殺し強盜其他罪の有る  
者おかつは勿論のことでは是れ亦引廻しの上獄問と事極り愈々六月二十九  
日江戸中引廻しの上獄問と云ふので千住小塚原へ乗込みましたが何爲る  
江戸中の評判であるに由て見物夥しく黒山の如き人でございます五人の  
者はスーッと其處へ竝んで愈々刃の録と消やうと爲た時に清吉が、道、  
波伊猶豫を願ひます一句遣つて相果どう伊座い升から役人が、役サ早く  
云へ、道、ヘイ……武藏野にはびこる程の鬼薙今日の暮さに枝葉しはる、  
松ハ、兄イが詠つて小吉が遣らねへの口恨しい一ッ伊調ひナし升



文 化 噂 白 浪

二百二十二  
 ……死ぬ時も生るゝ時も紙轢り正鬼が無くて鬼の怨 役ウム次は……伊  
 小荷も一ッ道つゝけましよう……定張の鏡に移る紙轢り今日の曇さ天  
 下一同 役ウム 勝へイ妾も…… 彼何んど云ふ 勝是迄も作りし罪も  
 幻と消て行く身の心安けれ 喜兄哥や姐が違つたさち小荷も奥似を致  
 しませう……大坂の關路を越て東路へ喜八が残す首を見て置け……と詠  
 終つて眼を閉じ刑に就きままたと云ふは實に天暗の大賊では座います時  
 は文化二丑年六月二十九日で伊座います此五人に傳馬町の大半で死な  
 る鬼若金五郎本所線町でねかつに殺されたる梶田外記齋此二人を入れて  
 所謂文化七人白浪とやします永々は退屈様……

文 化 噂 白 浪 畢

定 價 金 拾 五 錢

明治二十八年十二月廿七日印刷  
 明治二十九年一月二一日發行

發行者 神田區佐久間町一丁目九番地 日吉堂 菅 谷 與 吉



印刷者 神田區柳原河岸第十四號地 龍雲堂 大 場 沃 美

發賣者  
 大川屋 銳吉  
 山口屋 本店  
 近江屋 商店  
 上田屋 本店  
 辻岡屋 書店  
 木屋 宗二郎  
 金櫻堂 書店  
 井上 書店  
 金川堂 書店

關西大賣捌

大坂心齋橋北詰 競爭屋 中村芳松



